

NHK学園生涯学習フェスティバル

武蔵野市俳句大会

令和元年八月三日（土）午後一時～四時

武蔵野市民文化会館（東京都武蔵野市）

第一部

一、開会あいさつ

NHK学園生涯学習局長

砂押 宏行

武蔵野市長

松下 玲子

武蔵野文化事業団理事長

青木 稔

一、選者紹介

一、対談「十七音への挑戦」

片山由美子・鈴木 章和

— 休憩 —

第二部

一、表彰

一、選評

NHK学園俳句倶楽部講師・「香雨」

片山由美子

エッセイスト・「NHK俳句」司会

岸本 葉子

NHK学園講師

神野 紗希

NHK学園俳句講座専任講師・「河」

小島 健

NHK学園俳句講座専任講師・「翡翠」

鈴木 章和

（五十音順）

一、当日句「武蔵野の夏を詠む」入選発表

岸本 葉子・神野 紗希

総合司会 フリーキャスター

北林きく子

ごあいさつ

NHK学園理事長 浜田 泰人

本日ここに「NHK学園生涯学習フェスティバル 武蔵野市俳句大会」を、皆様とご一緒に開催させていただきます。

今回お寄せいただいた作品数は、自由題、題詠「野」あわせて四千二百九十二句にのほりました。お寄せいただいた俳句の一つ一つは、作者おひとりおひとりの心のうちに、この文芸が深く根を下ろしていることを教えてください。日々のくらしと経てきた人生経験を見つめ、俳句を通してみずからの言葉と心のあり方を探求されておられる方々がこんなにも多くいらっしゃることを知り、心より感銘を受けております。

わが国の古い伝統の上に築かれた短詩型文芸は、時代が変わってもその意義は変わりません。

昭和五十六年に開設された俳句講座は、これまでの三十八年間に、五十六万人を超える方々が学んでこられました。この流れがさらに大きく豊かになっていくことを願い、講座内容をはじめこのような大会や俳句学習の旅（スクーリング）など、教育文化事業の充実に、なお一層努めてまいりたいと思っております。多くの皆様のご参加とご支援を、よろしくお願い申し上げます。

なお、本日の大会大賞三作品は、各地で開催される大会の大賞作品とともに令和元年度の文部科学大臣賞候補作品となります。

最後になりましたが、大会の開催にあたり、選者の先生方、ご投句いただいた皆様、ご協力をいただいた東京都・武蔵野市ほか関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和元年八月三日

対談・選者



片山由美子（かたやま ゆみこ）「香雨」主宰 NHK学園俳句倶楽部講師
 昭和二十七年千葉県生れ。鷹羽狩行に師事。公益社団法人俳人協会常務理事。第五回俳句研究賞、第二十二回俳人協会評論賞、第五十二回俳人協会賞を受賞。句集に『水精』『天弓』『風待月』『香雨』、評論集に『現代俳句との対話』『現代俳句女流百人』『俳句を読むということ』『季語を知る』、エッセイ集『鳥のように風のように』など。

一面に咲き向日葵は個々の花



鈴木 章和（すずき しょうわ）「翡翠」主宰 NHK学園俳句講座専任講師
 昭和三十年静岡県生れ。平成二年、平井照敏に師事。ことばの持つ力について学ぶ。平成十六年「翡翠」創刊、主宰。句集に『月の客』『夏の庭』『野を飾る』。
 NHKラジオ「文芸選評・俳句」選者。

さるすべり小鳥の水も替へにけり

選者



岸本 葉子（きしもと ようこ）「NHK俳句」（第二週）司会
 昭和三十六年神奈川県生れ。エッセイスト。大学卒業後、会社勤務、中国留学を経て、執筆活動に入る。食や暮らしのスタイルの提案を含む生活エッセイや、旅を題材にしたエッセイを多く発表。著書に『俳句、はじめました』『俳句、はじめました 吟行修業の巻』『エッセイの書き方』『俳句、やめられません』『岸本葉子の「俳句の学び方」』など。

箱庭の橋に夕風通しやる



神野 紗希（こうの さき）現代俳句協会青年部長 N H K 学園講師

昭和五十八年愛媛県生まれ。高校時代、俳句甲子園をきっかけに俳句を始める。平成十四年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞受賞。句集に『星の地図』『光まみれの蜂』、著書に『日めくり子規・漱石 俳句でめぐる365日』（第三十四回愛媛出版文化賞）『初心者にやさしい俳句の練習帳』など。

水脈も葉脈も春てのひらも



小島 健（こじま けん）「河」同人 N H K 学園俳句講座専任講師

昭和二十一年新潟県生まれ。石田波郷門・岸田稚魚、角川春樹に師事。公益社団法人俳人協会常務理事。日本文藝家協会会員。句集『爽』『木の実』『蛍光』『小島健句集』他。著作『大正の花形俳人』『いまさら聞けない俳句の基本Q&A』『俳句練習帖』他。俳人協会新人賞受賞。

雨脚は太きがよろし冷し酒

全作品を名前を伏せて、全選者にそれぞれ入賞入選作品を選んでいただきました。大賞、特別賞は特選の中から選の重なりを考慮しつつ、N H K 学園大会事務局で決定しました。

NHK学園武蔵野市俳句大会大賞

玉子焼きほどの明るさ春の夕

千葉県 鶴田ちしほ

新樹より飛び出してくる都電かな

埼玉県 清水克代

△題詠「野」▽

野兎跳ねて春満月の上がりけり

茨城県 茂呂典正

武蔵野市長賞

夜泣きの見くるみて月へドライブす

栃木県 深谷 泰子

武蔵野文化事業団賞

木下闇から躍り出て野外劇

岐阜県 水上 れんげ

片山由美子 選

特選

星の数間違へてゐる 天道虫 埼玉 瀬川 節子

星が七つあってこそその天道虫と言いたいのだろう。テントウムシ科に分類される昆虫は日本にいるものだけでも一五〇種ほど。一般にはアブラムシやカイガラムシを捕食する益虫と考えられているが、中には草食性の害虫もいる。星の数もさまざまなので、間違えていると言ったところが楽しい。

まさなる雨後の山あり啄木忌 神奈川 藤枝 信雄

啄木忌は四月十三日。山々は芽吹の時を過ぎ、既に緑の鮮やかな季節となっている。雨に洗われていつそう美しいことだろう。晴れ上がった空も見えてくるようすがすがしい作品である。啄木の故郷の岩手の山を連想させるところもあり、奥行のある一句になっている。

……題詠「野」……

木下闇から躍り出て野外劇 岐阜 水上 れんげ

外国では夏になると野外劇場でオペラが催される。野外劇、野外コンサートなど、みな夏の季語として詠んで構わないと思うが、この句は木下闇を季語としている。演出の一つとして、そこにある木下闇を効果的に使った劇なのである。冒頭で、主人公が現れたところかもしれない。

秀作

一人欠け二人欠けゆく花むしろ 宮城 齋藤 仲光
 あと十年生きる約東青嵐 埼玉 今井喜久江
 咲ききつて音なくくづれ白牡丹 愛媛 西川キヌエ
 帰省して顔見せに来る従兄かな 山口 松浦美智子
 江ノ電の掻き鳴らしたる軒風鈴 愛知 城山 憲三
 かげるふの向かうの人へ逢ひにゆく 栃木 渡辺 輝夫
 山城は石垣ばかり朴の花 秋田 武田 ミツ
 山影の及ばぬところ梅早し 東京 佐藤 孝志
 げんげ田に花の冠忘れけり 岡山 中山 幸子
 香水をひと吹き溜め息もひとつ 埼玉 内野 義悠
 白秋のたどりし道や葛の花 東京 繁山 邑子
 浜日傘立てて母子の砂遊び 茨城 大岡 幸子
 大空の急流を行く五月鯉 群馬 吉井たくみ
 みづうみへ入る川いくつ風光る 長野 木原 登
 牡丹の闇の重さに散りにけり 神奈川 塚本 治彦
 どくだみの夜には夜の花明かり 長野 児玉 君子
 花筏しづかに向きをかへにけり 東京 山崎 澄子
 来ぬ人の噂ばなしや溝浚 秋田 堀 昭治
 ポケットの中は空つぽ青き踏む 福岡 福田 隆
 叱りたる子に山もりの豆ごはん 神奈川 小塚 信江
 ……題詠「野」……
 由布岳の冷えびえと峻つ野焼跡 山梨 平井 泰輔
 野に戻す遺跡に生ひし夏薊 千葉 大久保文夫
 土筆野にふはり到着地竹トンボ 東京 田村登代子
 野牡丹の咲いて一夜の帰郷かな 福島 五ノ井研朗
 一本の果てなき鉄路大夏野 愛知 梶田 遊子

佳作 掲載は氏名五十音順です。

早朝の道の掃除や手毬花	青木 素子	夏の蝶見しは一瞬大空へ	井上 敏子	靴跡に逡巡ありて夕桜	岡田 邦男
明け暮れや風の寄り添ふ余り苗	芥川 卓	白百合のさゆらぐ風の切通し	井上 宣孝	記帳せる筆やはらかし春の風	岡田 邦男
山登る老うぐひすに歩を合はせ	安達 知子	春疾風吊橋に来て猛りけり	今井 善衛	一片の落花に土の新たななる	岡田 邦男
春風や走りだしたりランドセル	穴井 輝子	母の日や無断で使ふ母の筆	今井 哲也	風鈴や音のさざなみ軒渡る	岡田 敏彦
ペランダに産着靡くや初幟	阿部 利江	母子草うれしき時も母は泣く	今岡 梢	草取りの相手は地球草を引く	岡本 明子
夕焼に声まで染めて子ら帰る	荒木 信夫	文机の置き場は変へず更衣	岩田 勝	先生の声に始まるプールかな	奥田 雅美
校門にしばし佇む卒業子	荒木 信夫	風青く村は平に梨の花	岩溪 しげ	みどり子のあかり追ふ目や走馬灯	小栗しづゑ
永き日や鉄手にして庭に立つ	安倍 和也	花水木葉陰に花の見え隠れ	宇賀村彰二	呼び合へば木霊かへるや茸採り	尾関 金義
数へ日のファックスを知る計報かな	飯野 定子	夕立の匂ふ満員電車かな	内田 創太	震へつつ北指す磁石鳥帰る	尾関 當補
父と子の縞のTシャツ町薄暑	生馬 明子	この先の五年を思ふ更衣	榎本 節子	おいそれと道をあけてはくれぬ蝦蟇	小野 麻利
校門に入りて猛るや春疾風	池谷 硬司	みちのくのきれいな空気星涼し	遠藤 克子	釣船の舳先揃ふや春の潮	垣内 重行
芋虫の全足力に道過る	池田タマキ	一人降り乗る人もなき雪のバス	遠藤 操	静かなる病棟照らす夏の月	葛西 れい
重き荷を下ろして暫し片陰に	池田 雅夫	華やぎは水にもありて花見船	大石 坦	玉砂利に吸はれて消ゆるぼたん雪	笠原 榮
鯛のやつて来さうな怒濤かな	石川 明	武蔵野の大地持ち上げ路の薑	大川 千草	万緑や哀しきときも人は笑み	門脇 明子
鹿寄せのホルンや春の飛火野に	石川 幸代	夏川に飛び込む子らの齒の真白	大川 千草	溜池を染め尽くしたる桜かな	金子日出子
皇后のドレス鴉色風薫る	市川 紀子	初蟬の息足らぬかに鳴き止みて	大川 千草	剣道部の声かき消して青嵐	蒲谷きよみ
夏空に仰ぐ連峰阿尾の宿	市川 弘之	せせらぎの音も一品夏料理	大川 千草	遠足の話の尽きぬ夕餉かな	神根 信
玫瑰や海みつめゐる少女像	市川 廉	せせらぎに耳そば立つる水芭蕉	大久保文夫	宙返りして急降下夏つばめ	神根 信
病室の母の窓辺に酔芙蓉	伊藤 純子	絵日記の真っ白日焼けの子	大久保宥子	夏木立広場の椅子に座りをり	鴨井 清
三匹の小犬が遊ぶ花の下	伊藤 哲	口笛の屋根の少年夏の月	大野 兼司	頁繰る音のさやけき夜長かな	川崎 和啓
鶏鳴の高きにぬけて梅雨明るる	伊藤 柳香	流れにも序破急ありて花筏	岡田 邦男	青空に目を凝らしをり蟬の殻	川崎 和啓

夫の声ふりむけばただこぼれ萩	川崎 康子	大川の風を抱き込む鯉幟	後藤美智子	ゑんどうの花や関東ローム層	泉 耿介
燕来る旧街道の家敷町	川副 康孝	かき分けてかき分けて萩風のなか	五ノ井研朗	西日さす税の上がる美濃の町	芝田 太
武蔵野の空ひるがへるつばくらめ	河田 公枝	母の日や三面鏡はまだ生きる	小橋 辰矢	天瓜粉つくり話の上手な子	嶋田 奈緒
竹の子の伸びて少年変声期	川村 幸子	梅雨入りや錆の浮き出た烏口	小松 清	スコップを軒先に立て除雪終ふ	島津 義浩
ファックスが吐き出す知らせ夕薄暑	岸下 庄二	食卓にばら一輪の誕生日	齋藤智恵子	大輪を風にあづける牡丹かな	清水 清伺
青空のどこからとなく囁れる	岸本 悦子	れんぎょうは人待ち顔に咲き揃う	齋藤 義雄	三姉妹同じレモンのかき氷	清水 清伺
かなしみを殻に背負ひてかたつむり	北川喜里恵	何もせぬことが日課や藤の花	酒井 芳一	過去ひとつ消しゴムで消し夏霞	清水 檀
あぢさゐの藍の深まりゆく七曜	衣川 洋子	初詣でスキップしては振り向く子	坂上 晃	夏帽のリボン違へて姉妹	清水ゆみ子
待つことは生きることなり蟻地獄	木下 涼薫	夕刊の薄くなりをり梅雨じめり	坂本 徹	木下閣古刹に続く石畳	上古 眞澄
遠足の列に遅れて棒振る子	木下 涼薫	どの家も橋ある路地や夕つばめ	酒谷 貞子	雨過ぎて空の青さよ楠若葉	庄瀬 武
新緑やボール投げ合ふ子等の声	君塚 房子	ソーダ水いつ気飲んで別れけり	相良 研二	溝浚へ終へて近所に馴染みけり	新保 徳泰
参内の列へ五月の風そよぐ	木村 良昭	山門の傾ぐ菩提寺藤の花	桜井 青尚	日前をひらりとよぎる白き蝶	須賀 下枝
田水張る朝の光を展げつつ	桐山 甫	病窓の朝な夕なの桜かな	笹野 青陽	アトリエは美術館へと樟若葉	菅井 美佳
ついと来て雲に乗りたる水馬	久我富士枝	獅子舞に頭かまれて泣く子かな	佐藤 聡	黄水仙日本海を見下ろして	菅原 孝子
名を付けて子には宝の兜虫	楠 暢太	白日傘開く涙を振り切つて	佐藤 志乃	髪洗ふ善き事のみを思ひつつ	須崎 輝男
一村は甘き香りの花蜜柑	蔵 堯子	凍滝となり一本の棒となり	佐藤 孝志	梅の実を挽がねばと言ひまだ挽がず	鈴木伊都子
荒海をまへに芭蕉布織られゆく	栗坪 和子	水打つて蠢きはじむネオン街	佐藤 正博	物置のよく片付きて柿若葉	鈴木伊都子
小上がりに席ゆづり合ふ泥鰌鍋	栗山 純臣	菖蒲田に立てば絵巻の中かとも	佐藤ます子	盆の家猫は子ら避け柵の上	鈴木 節子
帰りにも鳩の浮巢に目を凝らし	黒田 恵子	舟遊び彦根に残る武家屋敷	佐野 明美	木下閣ずつと動かぬ二つの眼	鈴木 武
ロープウェイ雪渓を越え峰を越え	桑高 喜秋	身を屈め御身潤す仏生会	佐野 月子	待ち人が来て噴水の高くなり	鈴木 正子
軋み曲る路面電車や街薄暑	小沢 芳治	四万十の魚を膳に夏座敷	座間 英幸	白薔薇や小さき扉の修道院	鈴木美紀子
雲ひとつ置かぬ立山鯉幟	小嶋トシコ	産着干す家の大きな鯉のぼり	参鍋 敏子	蟬時雨ダム放水の止めばまた	鈴木美智子
卯の花や上り框の黒光り	小塚 信江	立ち寄りしハモニカ横丁春の暮	椎原美佐子	山国の空引き寄せて桐の花	角 雅行

父の忌や泰山木の花の盃	瀬川 節子	泥はこび餌をはこびて夏燕	豊田 明	ささやきの聞ゆる如き若葉風	野島 巧休
トーストのバターのきらり初夏の風	関 雅己	立山を代田に映す散居村	中沖 稔	田植済み村が明るくなりけり	橋場 之廣
遠き日のことあれこれと百日草	瀬端 忠男	余生にも自由不自由夏はじめ	中川 計介	梅の実のひそかに太る葉隠に	橋本世紀男
花冷えや城の修理の続きをり	園田 和子	紙飛行機ふはり着陸苜蓿	中川すなを	紫陽花のいろ移りゆく雨の庭	長谷川京子
花吹雪また花吹雪庭真白	園田 和子	榧の実や昭和は遠く父母遠く	中川 月見	老人の夕餉は早し夜の秋	長谷川京子
上を向けと言ふが如くに松の芯	園田 和子	霾や眼科医院の混み合ひて	中澤 草子	吊橋を揺らして渡る麦の秋	濱中アキ子
ふるさとの母のかの日の冷し汁	高田 貞子	病状にふれず面会雪催	長澤 享	病院は時計ゆっくり花曇	原田 幸子
久々に花瓶を満たすカーネーション	柚木 久枝	誰一人急がぬ旅や蝸牛	中島 保	佇めば見渡すかぎり麦の秋	原 雅
山国の穢れなき空花辛夷	高橋 裕子	旅先で子に書く葉書夜の秋	中島 優子	あけ放つ窓といふ窓風五月	張替 和子
旧道に続く板塀柿若葉	高橋 裕子	田水張る空行く雲を映しつつ	なかしまあゆむ	つぶらかな小犬のひとみさくらんぼ	張替 和子
千年の道千年の泉かな	高畑 半身	呼び水のきしむポンプや蝶の昼	中根 武郎	ラムネ玉空の青さを呑みほせる	平田きよし
しばらくは下り坂なり若葉風	武井 猛	りんご受く小さきてのひら二つ寄せ	中村 頌子	噴水の届かぬ空へ鳩の起つ	平松 貴子
竹の秋水水場に水ひたひたと	武井 猛	どくだみを干して一病ものとせず	中本紀美代	こんもりと古墳を俯瞰夏の雲	深澤 美子
薫風に乳房ゆらりと牧の牛	武井 猛	さくらさくらどの道行くもさくらかな	西 幸敏	太陽のあまねく届き麦の秋	深澤 美子
訝して植田の中を貨車が行く	武田 ミツ	鉢植えの一輪のみの冬の菊	西尾桃太郎	面売の来て春風に面を吊る	福井 英敏
船べりに舟寄せ来るやマンゴー売り	谷口 畔水	池の端に雨情の歌碑や行々子	西川 金治	葱坊主ぼつりと愚痴をこぼしけり	福士 重子
猫柳水増す流れすれすれに	田村サキ子	線香の煙あびたり梅の寺	西川 金治	初燕一日風の吹き荒れて	福田すみ江
馬鈴薯の花母の背の見え隠れ	田村 陽子	眠る子にそつとはづしぬ軒風鈴	西村 久子	藤棚の房に一日の重さあり	藤枝 信雄
働かぬ蟻もをるらし蟻の国	塚本 治彦	ゴンドラの影ひく山の青葉かな	西村 久子	桜桃忌あまりに空の青すぎる	藤岡 定子
ためらひて外し道聞くサングラス	土屋 洋子	晴明の光散らばる江戸切子	額田 昌安	今朝会ひし人に葉書や初蛭	藤川 和男
竹の秋踏みしめる径やわらかく	筒井 祖晋	動くもの雲ばかりなり春の昼	額田 昌安	引越しのトラックが行く雲の峰	森 由布子
風花の舞うて神事の始まれり	出島 達子	軒下に雀逃げ込む夕立かな	能田 孝昌	武蔵野の上水速し夏柳	古屋 一雄
初蛭一番星と出でにけり	友田しげを	牡丹の夕日の中に崩れけり	能田 孝昌	山藤の岩畳へとのびにけり	堀米 澄子

夏立つや水奔放に用水路	堀米	澄子	空蟬の目玉残りて未だ青き	柳川	惠連	………題詠「野」………		
月下美人月の光をはね返す	松木	溪子	太宰忌のうす闇匂ふワイン蔵	矢野	みはる	みよし野の奥へと桜紅葉かな	芥川	卓
新築の家五六軒風薫る	松崎	博	たんぼの絮駆けよりに吹きにけり	矢原	百合子	武蔵野の空いつぱいに櫻の芽	阿部	晴江
青蔦や家の形が出来上がり	松田	紀子	目に見えぬ航路ひたすら聖五月	山口	美代子	武蔵野のみささぎに風夏きぎす	石井	俊子
花冷や亡骸のまだ温きこと	松田	紀子	全身の耳となりたる滝の音	山田	知明	野いちごを引き寄せつまむ兄いもと	市川	紀子
木の影に影おとす鳩春の昼	松永	圭子	大阪城正眼に仰ぎ入学す	山田	浩子	夕映への野菊のうしろ姿かな	井出	久美子
いささかのこだはりありて水を打つ	松山	真弓	ゆたかなる弥陀の耳朶あたたかし	山田	凍崖	葬列の芒野分けて進みけり	出田	清子
筍の香り満ちたる厨かな	丸山	竹野	新緑や御朱印の朱の鮮やかに	山田	凍崖	野球部の声夏空へぶつかれり	伊藤	哲
舟でしか行けぬ神社や新樹光	萬年	和子	ふる里を離るる車窓十三夜	山田	ユリエ	吹く風も色を失ふ枯野かな	伊藤	はじめ
梅雨晴れ間小鳥の声で目を覚まし	彌榮	三郎	東京に一つの村や鳥渡る	山中	節子	沈黙の野辺の送りや送り梅雨	今井	理務
しげさの果をさまよふヨットかな	三玉	一郎	子ののぞく蛍袋の花のうち	山本	多津子	武蔵野にのこるせせらぎ螢飛ぶ	岩野	記代
別れては出合ふ木道花菖蒲	水上	れんげ	水音に始まる暮し木の芽時	山本	則男	武蔵野の風の香りや深大寺	植栗	ゆうじ
捨て舟に波の寄せくる夏はじめ	三村	清子	故郷の遠くなりけり冷索麵	與語	和彦	大夕焼富士の裾野のくつきりと	宇賀村	彰二
背もたれが頼もしき椅子新茶汲む	向井	麻代	逝きし子へ母のバラード吾亦紅	吉海	江令子	星いくつ生まれ夏野のコンサート	内田	創太
遠足の子のなでて行くはな子像	武藤	洋一	母の日や花屋の前に立ち止まる	吉田	武夫	武蔵野の空朗々と夏ひばり	梅田	ひろし
神田川源流の池鴨涼し	村田	浩	賛美歌の流れ来る丘風五月	吉積	漫歩	あるなしの風の真昼や野火煙	大石	懋
さざ波の光る湖若葉風	茂木	操	波に組み波に崩るる花筏	米倉	和美	野あやめの道の先なる津軽富士	大久保	文夫
馬駆ける牧の青空閑古鳥	百瀬	信之	母も見る離ればなれに春の月	米倉	信山	熊野路の深まるみどり夏浅し	大成	金吾
足裏の砂はさらさら夏きぎす	百田	登起枝	黒潮や宮古上布の藍深し	若林	正人	夏野裂く一本道をひた走る	岡根	尚美
葉桜のざわめきを聞く百花園	森	孝枝	亡き妻の影としばらく踊りけり	若林	正人	野球部の声掛け合うて春の土手	小野	薫
ジャスミンの香る団地や子等通ふ	森	安千代	父の日やこの頃涙脆き父	和田	強	帰省子のまつしぐらなり野の小川	小野	トメヨ
ひなげしや外国船の着く港	森	祐司	朝まだき鶯のこゑ竹林に	渡邊	和子	武蔵野の端に住まひて麦の秋	鹿見	嶋栄子
姉が吹き妹が追ふしやばん玉	矢内	とき子	帰省子に抽出しひとつ空けにけり	渡辺	純子	武蔵野の木立に夕日桜桃忌	加藤	梅夫

花野行く暗齒まぶしき娘たち	加藤 哲	夏草や犬一匹と羊百	清水ゆみ子	高らかに銅鑼で始まり野外劇	平松 貴子
武蔵野の落日抱きて冬木立	川副 康孝	武蔵野の冬の櫂となりけり	志村 美好	田起しを止めて見送る野辺送り	堀 昭治
長老の号令一下野火放つ	岸下 庄二	野火走る阿蘇の五岳をけづらせて	杉本恵美子	野の隅に八十八夜の煙立ち	益田満寿美
野へ放つ模型飛行機風薫る	木嶋 純子	つくし野に子等の歓声風渡る	鈴木 昭子	土筆野や頬杖つく子寝転ぶ子	榊本 俊明
よちよちの子を野へ放ち蝶の昼	衣川 洋子	野遊びや池塘に白き雲浮かぶ	鈴木美紀子	フリスビー大きく逸れて夏野かな	さとう菓子
草青む野に一本の山羊の杭	木下 涼薫	暮るるまで野に遊びをり栗の花	関 雅巳	安曇野は水の匂ひや夏来る	松尾 一子
妖精の絵の具こぼれし花野かな	木下 涼薫	朝まだき飛火野の鹿草を食む	園田 節子	高野への道はここより稲架襖	三村 清子
わが眉を風の掃きゆく春野かな	木原 登	雲雀野や散骨といふ葬のあり	高原 晴子	風が巻き風が広げて野焼の火	村橋 克雄
土筆摘むかつて合戦ありし野に	木村 良昭	武蔵野の青空分けて揚雲雀	武井 猛	野葡萄や子狐二匹見え隠れ	森 要子
外野手のよく通る声夏に入る	久野眞喜恵	野良猫や子猫銜へて長屋門	辺 明	合歓咲くや野羊の小屋から野羊の声	森 要子
雲雀野や棚田伝ひに法隆寺	久保 厚夫	曲がるとき電車傾く夏野かな	谷口 一好	腕立て伏せしてみたくなる春野かな	山岸 嘉春
武蔵野に国分寺跡緑立つ	久保田敏子	草にある匂ひそれぞれ野に遊ぶ	為成 央子	野の果に夕日入りゆく青薄	山本多津子
武蔵野の空や白雲木の花	黒田 恵子	野施行や先細りゆく獣道	塚本 治彦	野ばら咲く昨日にまさる子らの声	吉岡 昭子
野の起伏香りの起伏ラベンダー	小柴 智子	寒柝に武蔵野の星光りだす	友田しげを	草笛も聞こえる野外授業かな	吉川美恵子
春の野やけんけん跳びを繰り返す	兎玉 憲文	野遊びや幼の靴の脱げ易く	中沖 正之		
野遊びの指先みどり子も母も	後藤 明美	円陣の野球少年雲の峰	長沢おさむ		
ひざついて牛の反芻大花野	後藤 玉喜	安曇野にサイクリングや夏燕	西山 玲子		
夜長の灯囲みて遠野物語	木幡 嘉子	枯野から大きな鳥の翔ちにけり	能田 孝昌		
子等の声野に散りばめて五月空	金 道博	野あざみの葉先するどしけもの道	橋本 久子		
野茨や並んで走るスニーカー	齋藤智恵子	野苺を摘めば新たな道のあり	羽矢 真人		
武蔵野や八十八夜の月あかり	笹野 青陽	ナイターのホームラン待つ外野席	毘舍利愛子		
小満の鋤打つ野鍛冶火花ちる	佐藤ます子	草茂る荒れ野に畦の名残りかな	毘舍利道弘		
夏の野に生まれたてなる心地かな	佐藤 羊子	玄関に誰かが置きし野菊かな	風街ゆう子		

岸本 葉子 選

特選

屈みこむ 天皇終の種選 千葉 飯野 武仁

改元を詠んだ句が多い中、着眼が独特です。ニュース映像は種選でなく種まきのシーンだったかと思いますが、「屈みこむ」に実感があります。土に膝をつくことをいとわぬ君主の在り様と老いも感じさせます。時事俳句は難しいといわれますが、「終」とあらかじめわかっているこの機会だからこそ詠み得た句です。

玉子焼きほどの明るさ春の夕 千葉 鶴田 ちしほ

春の夕をこのように表した比喩をはじめて見ました。玉子焼きは「明るさ」の他にも、艶やかさや甘さ、懐かしさがあり、蕩けるようなやわらかさも内包しています。即物的な表現ながら「春の夕」の情趣と合っています。意外性と共感性とを巧みに両立させながら、力みを感じさせないことも魅力です。

……題詠「野」……

野火止の流れに消ゆるえごの花 埼玉 武藤 三山

野火止は江戸時代に開削された用水路。「消ゆる」で景が鮮明になりました。えごの花の咲く頃の流れの速さ。えごの花の小ささや、一片ずつ散らばらずに花の形のままぼとりと落ちる姿も目に浮かびます。昔は洗濯や魚捕りに使われ、水にも人の暮らしにも縁の深い花。古くからその地にある人の生活も思わせませす。

秀作

早春のどこかで水を掬ふ声 山梨 平井 泰誦
 涼しさや伏流水が砂を吐く 宮城 齋藤 伸光
 盆灯籠吊してよりの波の音 東京 大川 千草
 物置のよく片付きて柿若葉 東京 鈴木伊都子
 葉桜や始まりは透けさうな色 岡山 池田 純子
 子ののぞく蛍袋の花のうち 東京 山本多津子
 銭湯の煙突古りぬ夏の月 神奈川 宮澤 和子
 初夏の扉は軽し美容室 千葉 毘舍利愛子
 青空のどこからとなく囁れる 兵庫 岸本 悦子
 花冷の鎖骨に重き首飾り 福岡 風街ゆう子
 夕刊の薄くなりをり梅雨じめり 千葉 坂本 徹
 緑陰や盲導犬の募金箱 兵庫 横山はるみ
 切抜きを冊子に仕立て暖かし 和歌山 米澤かほり
 柚子一顆回覧板に置いてあり 新潟 中澤 安子
 連結を外す一揺れ花辛夷 群馬 牛久保悦子
 良書得て雑踏涼し吉祥寺 神奈川 和田 章子
 献血に並ぶ若者新樹光 大阪 原田 咲子
 ゴンドラの影ひく山の青葉かな 東京 西村 久子
 先生の声に始まるプールかな 東京 奥田 雅美
 建造の巨大タンカー風光る 岡山 中山 幸子
 ……題詠「野」……
 武蔵野の冬の櫂となりにけり 埼玉 志村 美好
 寒桥に武蔵野の星光りだす 東京 友田しげを
 星いくつ生まれ夏野のコンサート 東京 内田 創太
 花野には花野の風の吹き止まず 東京 橋本世紀男
 ほろ酔の野球拳せし茶屋の春 新潟 荒井 古鷹

◆佳作◆ 掲載は氏名五十音順です。

春光の郵便バイク待ちにけり	四十物文代	満開の桜の中の二重橋	井原 文江	名を決めて産声を待つ月涼し	奥村 利夫
花の山仏舎利塔はあのあたり	四十物文代	白藤へ明かり残せし夜の道	岩田 勝	仔犬嗅ぐ上がりたてなる春の雨	奥村 芳弘
手を膝に正午の時報敗戦日	青木 一夫	文机の置き場は変へず更衣	岩田 勝	チューリップおとき話を語りだす	奥村 芳弘
消しゴムに付く字の欠片鳥雲に	東 昇	連翹の門より捌ける通夜の客	植 朋子	入学の夜や新たな部屋へ風	尾崎千代一
振袖の孫の遺影やさくら餅	安積 邦夫	遠足の声体内に盧遮那仏	上村 佳与	菓子包む和紙の薄さや花曇	小田原やちよ
菜の花や雑種の犬と十二年	阿部 啓子	粉雪のただ真つ直ぐに真つ直ぐに	宇賀村彰二	この道をまつすぐ行けば白鳥座	小野 薫
検診車積んで五島へ夏の航	阿部真佐朗	わかば風余白のおほき時刻表	内野 義悠	夜の新樹あなたはスパイかもしれぬ	小野 啓々
裸木の鳥の梢の動くのみ	飯塚 柚花	いちまいの水の厚さやみずすまし	内野 義悠	葉桜や影を濃くして人を待つ	笠原 榮
父と子の縞のTシャツ町薄暑	生馬 明子	経本のわづかに黄なる午下の夏	梅原 清音	集落のあれば墓あり燕来る	笠原佐千子
看護師の福寿草ほめ帰りけり	石川アキ子	文字を書くちからおとろえ春の雪	江口八重子	川面より低き釣具屋五月晴	金子日出子
喫茶店のさらさらカレー巴里祭	石川 春兔	さらさらと小松菜洗う水の音	江口八重子	遠足の声の集まるゴリラ前	加納 金子
夏木立よりジーンズの男来る	石川美恵子	初蟬の息足らぬかに鳴き止みて	大川 千草	各々に結び方あり笹粽	上村富美子
流鏝馬の音の彼方の海蒼し	石戸 幸子	星砂を蹠に踏みて夏惜しむ	大川 千草	大安の文字にて終はる古曆	川崎 和啓
虹立つや水飲む時の喉仏	伊丹 妙子	筍に武蔵野の土つけて売る	大川 千草	青空に目を凝らしをり蟬の殻	川崎 和啓
モルモットの鼓動を抱いて春惜しむ	市川 紀子	夏めくや一筆箋の字の流れ	大川 宣子	弓を引く父片肌の白上布	北浦 敏子
象の絵のちひさき如露や春の庭	伊藤 孝一	クレヨンの赤きお日さま原爆忌	大久保朝一	弦の音の漏るる小窓や聖五月	北島 孝子
衿もとを合はせ七福神詣り	伊藤 妙	手のとどく高さに朴の芽立ちかな	岡井マシミ	夕暮れにラムネの壺の重さかな	衣川 由美
鶏鳴の高きにぬけて梅雨明くる	伊藤 柳香	記帳せる筆やはらかし春の風	岡田 邦男	蟬時雨学徒出陣壮行地	衣川 洋子
蟻ん子の穴を小枝で突きみる子	稲葉 京閑	遠足の声をつめ込みバスが出る	岡田 邦男	流心に打ち込まれたる囀鮎	木下 涼薫
釣竿を砂に突き立て日傘かな	井上 宣孝	大皿に波のごとくに冷素麺	奥田 雅美	冬日濃し矢玉跡ある大手門	木下 藤香
黄金週間何はともあれステーキ焼く	井上 昌子	山繋ぐ高圧線やつばめ来る	奥中 和子	飯盒の灰皿囲み日向ぼこ	木下 嶺生

新緑やボール投げ合ふ子等の声	君塚 房子	どの家も橋ある路地や夕つばめ	酒谷 貞子	西日濃し書架の通路を行き来して	鈴木ひさみ
餡パンの臍にごまあり万愚節	吾亦紅	ソーダ水いつ気飲んで別れけり	相良 研二	待ち人が来て噴水の高くなり	鈴木 正子
参内の列へ五月の風そよぐ	木村 良昭	山門の傾ぐ菩提寺藤の花	桜井 青尚	白薔薇や小さき扉の修道院	鈴木美紀子
行く春や笛の名手の息遣ひ	京極和佳子	切通し抜けて根城の遅桜	佐々木勝子	蟬時雨ダム放水の止めばまた	鈴木美智子
あめんぼに重さありけり水へこむ	桐畑 佳永	歛の柄のすげ替へられし風光る	佐々木孝子	外野手の捕球つじを散らしけり	桐乃 すす
ひよつとこの莫塵を小脇に花の宴	草分 蠢爾	夕焼の裏には行けぬ競走馬	佐藤 無風	星の数間違へてゐる天道虫	瀬川 節子
歛洗ふ草の穂ちさき束にして	蔵 堯子	ベランダへ風溜まりをり夏隣	佐藤 敏文	ふかし諸兄と競ひし力瘤	関 千年雄
岩礁に海鷗佇む夕日かな	栗山 純臣	うららかやひよこの菓子に雌雄なし	佐藤 廣枝	トーストのバターのきらり初夏の風	関 雅己
春の星皿にソースで幾何模様	郡司 紀子	八畳に眠るやや児や青田風	佐藤 正博	自衛隊の官舎の二間豆の飯	関 美奈子
武蔵野の太宰の淵の春の水	剣持 紀夫	滝壺に風の湧き立つ茶店かな	座間 英幸	白魚やあるかなきかの水の色	瀬良垣宏明
同窓会の幹事の名まえ茄子の花	河野裕美子	亡妻や虹の端から降りて来よ	澤井 国造	田起しのエンジン音の競ひけり	高倉 早苗
雲ひとつ置かぬ立山鯉幟	小嶋トシコ	夕暮の萩のこぼれてゐる野道	三反畑 弘	折紙の兜飾りし喫茶店	高崎 雅明
優勝は新茶一箱喉自慢	小島美佐子	産着干す家の大きな鯉のぼり	参鍋 敏子	手を広げ大きき競ふ蛇の後	高瀬 雅彦
卯の花や上り框の黒光り	小塚 信江	天瓜粉つくり話の上手な子	嶋田 奈緒	久々に花瓶を満たすカーネーション	柚木 久枝
こどもの日洗濯物が増えそうだ	小橋 辰矢	枕木を渡すせせらぎ著莪の花	島津紀代子	玉虫の飛び来る部屋の夕明り	高橋 トシ
山吹の咲きて法話の掲示板	木幡 嘉子	二三粒校長の噛む今年米	島津 義浩	庄内は水のにほひの五月かな	高橋 裕子
カタカナノ叔父ノ遺稿ヤ終戦日	小林 英樹	早搗きの八人揃ふ餅の音	清水 洋	図書館にはり紙多き四月かな	高橋 弥生
夢ならさめて夫と娘の盆支度	小山惠津子	夏帽のリボン違へて姉妹	清水ゆみ子	新緑へ傾げりわれも吊革も	高原 晴子
食卓にばら一輪の誕生日	齋藤智恵子	新しきスニーカーなりたんぼ黄	清水 葉子	流星やサンドバッグを打つ男	高柳 ちゑ
地吹雪を背に受け駆くる通学路	坂 一草	火蛾の来る野外映画の白き幕	下和田真知子	しばらくは下り坂なり若葉風	武井 猛
何もせぬことが日課や藤の花	酒井 芳一	水中花市場の中の珈琲屋	新谷 辰雄	薫風に乳房ゆらりと牧の牛	武井 猛
己が影曳きて耕す父の背	坂本 恭子	梅の実を挽がねばと言ひまだ挽がず	鈴木伊都子	山城は石垣ばかり朴の花	武田 ミツ
鳩の声焼印うすき鎌を研ぐ	坂本 正夫	裏窓に墓の混み合う暑さかな	鈴木 仁	庭下駄になじむ足裏や夏はじめ	竹本 孝

しつらひは多事に渉れり牽牛花	田尻 武雄	林道の影賑やかや夏休み	沖野 良	緑蔭の献血バスに入りけり	藤根 豊
紺青の空を貫く大枯木	館野 純三	まつ先に象を見に行く子供の日	中村 頌子	長屋門くぐりてきたり初燕	藤平嘉兵衛
採血の看護師の指梅雨深む	田中 洋子	朝風や正時に始発船が発ち	中本紀美代	若葉風石柱白き県境	藤村 義治
炎帝や門柱に置く鬼瓦	谷 俊和	音もなく光るジェット機月白し	那須 伸子	籐椅子のいとこの脚にある脛毛	古瀬まさあき
船べりに舟寄せ来るやマンガー売り	谷口 畔水	しゃぼん玉追ひかけし子を追ひし頃	植原 郁子	引越しのトラックが行く雲の峰	森 由布子
その日より香水瓶に触れぬまま	輝	鉢植えの一輪のみの冬の菊	西尾桃太郎	武蔵野の上水速し夏柳	古屋 一雄
老鶯や墳丘巡る日向道	玉村 礼花	線香の煙あびたり梅の寺	西川 金治	庭球の音の重なる秋日和	保坂 嘉郷
鏡には己が目ふたつ敗戦忌	田村久美子	二寸ほど猫長くなる薄暑かな	額田 昌安	コロッケ屋の列しんがりにあつばつば	星野いずみ
雪溪がロープウェイに迫り来る	田村登代子	滝壺を出て新しき水となり	能田 孝昌	新茶飲む上がり框の泥の跡	堀毛美代子
草田男の墓へ薄暑の街外れ	田山 光起	花見莫塵巻きて同級会閉じぬ	野田 美子	山藤の岩畳へとのびにけり	堀米 澄子
牡丹の闇の重さに散りにけり	塚本 治彦	桑苺昔はみんな飢えてゐた	橋本 久子	鬼の棲む山の麓の蓬餅	柘野 雅憲
筆圧の強きを言ひて晶子の忌	津田 京子	交差点鎖骨涼しき女たち	長谷川和子	新聞に眼鏡を探す花の昼	松浦美智子
新樹光サイクリングの髪なびく	土屋 通子	高鳴きに雛守りたる雲雀かな	長谷川菊男	店頭の花房今日も少し伸ぶ	松岡 孝子
未帰投の僚機の影か春の星	手塚 雅風	手造りの草餅草の筋多し	羽立 和子	アカシアの花房今日も少し伸ぶ	松岡たけを
早々と春蚕に閨をとられけり	寺畑 好春	台風の時計の夜のステーキよ	濱田 朋子	空蟬の葉に爪たてしまま暮るる	松木 溪子
肘伸ばし選手宣誓夏空へ	外山観佳子	病院は時計ゆっくり花曇	原田 幸子	新築の家五六軒風薫る	松崎 博
逆上がり飴のこぼるる半ズボン	寅屋 照夫	下校児の鈴の音はこぶ麦嵐	久田美智子	自転車をかこむ若者春夕焼	松永 圭子
二発目は間を置き上がる花火かな	中沖 正之	面売の来て春風に面を吊る	福井 英敏	添書きは墨たつぷりの賀状かな	松久 茂嘉
夏日影ランドセルにも慣れてきて	中島 貞夫	初燕一日風の吹き荒れて	福田すみ江	日盛の腕逞しき少女かな	松山 真弓
朝刊をじつくりと読む春隣り	中田 弘	ポケットの中は空つぽ青き踏む	福田 隆	横浜の白き客船夏近し	三浦 茂
しんがりやチューバの少女緑陰へ	中田 良一	麦秋や煙にまかるる鎮守さま	藤井 ナオ	川風や湯治の人と見る花火	三浦 初音
春暁の一点にらむ仁王かな	中根 武郎	消えてなほ飛行機雲や桜桃忌	藤川 和男	別れては出合ふ木道花菖蒲	水上れんげ
春暁の厨に匂ふ合はせ味噌	中根 武郎	田植機の往路復路や水の上	藤墳 博明	寒禽や日にさらされて池の底	箕輪マキヨ

捨て舟に波の寄せくる夏はじめ	三日 清子	冷房を入れてもよいか今日あたり	若林 敬子	満天の星野に落ちていぬふぐり	川崎 康子
二日かけ唐灰汁粽出来上がる	三矢 泰彦	亡き妻の影としばらく踊りけり	若林 正人	武蔵野の落日抱きて冬木立	川副 康孝
参道に研屋来てゐる桜かな	宮内 信子	黒潮や宮古上布の藍深し	若林 正人	野良猫に話しかけたり春北風	川名せつ子
青と白のみの岬や風光る	宮内 信子	旅先は今日も決まらず冷奴	渡戸 道子	野へ放つ模型飛行機薫る	木嶋 純子
記念樹を檸檬と決めて苗木市	宮川千賀子	……………題詠「野」……………		草青む野に一本の山羊の杭	木下 涼薫
新緑の溢れんばかり診察日	宮坂美恵子	武蔵野の空いつぱいに櫻の芽	阿部 晴江	土筆摘むかつて合戦ありし野に	木村 良昭
吊橋のその先霧の匂ひたつ	望月 郁江	野遊びも遙かとなりぬ夫亡くて	飯野 定子	うかうかと刈られて螢袋かな	楠原 絢子
新緑や校歌に唱ふ城の山	森 孝枝	武蔵野のみささぎに風夏きざす	石井 俊子	野晒しの自転車そのままに晩夏	黒木 淳子
鞆を漕ぐや地球に繋がれて	森 要子	早朝の野球練習花は葉に	今井 哲也	野遊びの草の輪飾り置き去られ	小堺 政彦
万緑の湖ゆく船の操舵室	茂呂 典正	武蔵野の落葉明かりに読む句集	岩崎 絵美	春の野やけんけん跳びを繰り返す	児玉 憲文
鯉のぼりビル風飲んでうねりをり	山際 玲子	夕花野勝者立ち入ること勿れ	植 朋子	夜長の灯囲みて遠野物語	木幡 嘉子
ハンカチを返すためだけ君に逢ふ	山口 あき	自転車の空気たつぷり青野行く	梅原 清音	畑のものの野のものとさり月祀る	坂 一草
瑠璃鳴くや森の中なる美術館	山崎史保子	武蔵野は雑木林の芽吹きかな	大川 千草	霜柱ふむ武蔵野の一窪み	佐々木志う
貰い手のつかぬ子猫の大欠伸	山崎マサ子	野あやめの道の先なる津軽富士	大久保文夫	野茨の花にほつほつ雨のくる	澤田 れい
傘寿なるわれに母校の桜かな	山田 浩子	グラントの野球ボールや夏夕べ	大沼 遊山	春の野や牛放牧の背番号	重富美津恵
金閣の影くつきりと水の秋	山野 節子	乳牛の反芻つづく青野かな	大山みすず	野っ原に弁当拡げ春惜しむ	篠原 枕流
母の日や足踏みミシン修理する	山本カヨ子	一人酌む野蒜の酢味噌和え供へ	岡野 安代	草野球敗者にもある缶ビール	鈴木 武
軽暖やひと月分の処方箋	横田 令子	縄電車花野に車輛置いて来る	奥村 利夫	夏の野に気球に乗りし私の影	鈴木千佳子
監視小屋鶴の撒餌を山と積み	吉積 漫歩	野球部の声掛け合うて春の土手	小野 薫	虹消えて声掛け合ふや草野球	鈴木美智子
雑踏のなかを夫の来大きくさめ	吉本由紀子	本籍は東京府民つくしんぼ	小俣 禮子	田植機や野道に泥を落し行く	関 忠男
一幅の達磨に対す夏座敷	米倉 和美	末黒野のカルデラ道と噴煙と	甲斐 英俊	遠足や恐竜の歯の化石かも	関 美奈子
銀輪の光る湖岸や若葉風	米崎 功	消防士見守る中の野焼きかな	神根 信	朝まだき飛火野の鹿草を食む	園田 節子
寒波来る〇番線の京都駅	米澤かほり	試歩の杖下ろす茅花の白さかな	川崎 和子	雪残る山を背にして野営かな	高井 収

雲雀野や散骨といふ葬のあり	高原 晴子	野遊びのアーミーナイフ草に拭く	細野やすい
武蔵野の空の広がる泉かな	高柳 ちゑ	田起しを止めて見送る野辺送り	堀 昭治
父の日に父は無言で野良に在り	武井 猛	敗退の野球選手や晩夏光	前沢 五郎
もう何も捨つるものなき芒原	武井 禎子	フリスビー大きく逸れて夏野かな	さとう菓子
サイドカーに大鎌載せてゆく夏野	谷 俊和	安曇野は水の匂ひや夏来る	松尾 一子
曲がるとき電車傾く夏野かな	谷口 一好	裾野から始まる富士の五月かな	三玉 一郎
鉄橋を列車一両野梅咲く	田宮美和子	木下闇から躍り出て野外劇	水上れんげ
野ねずみの穴念入りに唾を塗る	田村 陽子	武蔵野や鉄路一直線に夏	宮岡 弘
ハンカチで取る野外ステージの席	外山観佳子	雲の峰外野を走る補欠の子	武藤 洋一
野遊びや幼の靴の脱げ易く	中沖 正之	夏木立野火止水路三百年	村田 寛文
円陣の野球少年雲の峰	長沢おさむ	腕立て伏せしてみたくなる春野かな	山岸 嘉春
少年の野太き声の赤い羽根	中澤 安子	桜見るなら武蔵野陸上競技場	ひーちゃん
カリヨンの鐘かげろふの野へ山へ	中根 武郎	野火の香をまとひし夫や茶碗酒	湯田 畠道
野遊びの立看板の迂回地図	西川 明美	野蒜摘む磐梯山を真向ひに	湯田 畠道
野の道のしめりがちな草紅葉	西久保キクノ	野茨や少年手足細長し	吉田 芳子
駒放つ阿蘇に青野のある限り	西山 勝男	つくし野やどこでも座りコンサート	米田 陽子
枯野から大きな鳥の翔ちにけり	能田 孝昌	縦走の友と別れて枯野かな	若林 正人
安曇野の土蔵を映す植田かな	林 滋		
青嵐箱型電車野を走る	馬場 弘子		
風止みて竹の皮脱ぐ音かすか	樋口 昇る		
ナイターのホームラン待つ外野席	毘舍利愛子		
草萌の藤村旧詩口遊ぶ	麓 勝子		
百円の朝採野菜冬日射す	保坂 嘉郷		

神野 紗希 選

特選

光陰のくらりと水草生ひにけり 長野 木原 登

万葉集に「古のふるき堤は年深み池のなぎさに水草生ひにけり 山部赤人」、過ぎ去る時を偲ぶ心を水草に託した歌がありますが、この句はたゆたい続ける時間の上に新たな春が生まれ、た尊さを、より純粋な光に結晶させました。「くらりと」がメビウスの輪のように、永遠と瞬間を結びます。

夜泣きの児くるみて月へドライブす 栃木 深谷 泰子

夜泣きの子が泣き止まないで、ケットにくるんで車に乗せ、寝かしつけようとドライブに出たのです。どうせ眠れないなら、私も気分転換、という気持ちもあつたかも。現代の子育てのライフハックを「月へドライブ」と粹に表現し、育児の辛さを、やさしい童話のような特別な瞬間に昇華させました。

……題詠「野」……

獣毛の乾くぬた場や野蒜摘む 岐阜 福井 英敏

野蒜を摘みに山野へ出かけた際、猪や鹿などの野生動物が作ったぬた場に、そこで泥浴びをした獣の毛が、乾いて吹かれているのを見つけました。自然の奥へ踏み分けてゆく山菜採りのリアルな風景が、ずっしりと再現されています。獣も人も、すれ違いながら、今を生きているのですね。

秀作

梅雨の蝶追ひてハモニカ横丁へ	埼玉	小池 令香
参道に研屋来てゐる桜かな	和歌山	宮内 信子
歯の欠けし象に刻みし春キャベツ	東京	高橋きよ子
武蔵野の甘酒を飲む別れ哉	鹿児島	沖野 良
玉子焼きほどの明るさ春の夕	千葉	鶴田ちしほ
発想を飛ばせ飛ばせと牛蛙	岡山	治郎丸順子
逆上がり館のこぼる半ズボン	兵庫	寅屋 照夫
反核のヘルメット拭く生身魂	愛媛	砂山 恵子
交差点鎖骨涼しき女たち	東京	長谷川和子
君影草一つ覚えのブツセの詩	群馬	島崎多津恵
角の立つ生クリームや朴の花	神奈川	星野いずみ
不登校の子の眼にも似て濃紫陽花	長野	宮坂美恵子
走り根の海へと延びて八月来	愛媛	岡野未由子
惜春という航跡のようなもの	兵庫	田中 俊
天頂へ向かふ飛行機雲暑し	東京	月城 花風
夜の雪に明るき橋や井の頭	大分	椎原美佐子
種牛の赤き眼や草萌ゆる	愛知	能田 孝昌
新しきスニーカーなりたんぼぼ	東京	清水 葉子
捨て舟に波の寄せくる夏はじめ	東京	三村 清子
蝶々になつた夢みる昼の象	京都	滝村 実
……題詠「野」……		
野遊びに一角獣も走り来よ	神奈川	蒲谷きよみ
武蔵野の落葉明かりに読む句集	神奈川	岩崎 絵美
虹消えて声掛け合ふや草野球	神奈川	鈴木美智子
急がずに待とう枯野の青む時	滋賀	米崎 功
野遊びのアーミーナイフ草に拭く	群馬	細野やすい

▼佳作▼ 掲載は氏名五十音順です。

網棚の上に求人誌夏来る	青木 一夫	眼の中に湖湛へたる栢榴売り	井出久美子	寺に立つ竹の鳥居や鳥交る	戎谷 久代
初産の町は武蔵野虹立てり	青木 素子	桜咲く秩父の水は冷たくて	伊藤 妙	一人降り乗る人もなき雪のバス	遠藤 操
馬老いて陽炎の中綱ひかれ	赤坂須己子	弓形の汀やさしき青葉風	伊藤 哲	啓蟄や鳴子こけしのおちよほ口	及川 永心
春の日や鯢の群れなすオHOOK	赤繁 忠弘	廃校の一樹の枿の実の熟るる	伊藤 絃美	だんだんに雲たれ来たりげんげん田	大石 懋
雨粒を頬に泰山木の花	赤瀬川恵美	母の写真句帳にはさみ藤まつり	伊藤 絃美	人が好き焼肉が好き生身魂	大川 千草
夏めくや大縄跳びの埃立つ	赤羽 克己	山菜莢の花を揺らして池の風	伊藤 満	初蟬の息足らぬかに鳴き止みて	大川 千草
窓際の草稿秋の珈琲屋	明 惟久里	夕月にこぼれて白き桝の花	井上 宣孝	星砂を蹠に踏みて夏惜しむ	大川 千草
「母子ともに元氣」とメール春の宵	阿久津利江	黄金週間何はともあれステーキ焼く	井上 昌子	クレヨンの赤きお日さま原爆忌	大久保朝一
檀ふみの涼しき声に目覚めけり	阿部眞佐朗	おほでまり揺れて十連休終る	茨木由己子	出入口広き犬小屋春が来た	小島 徹
鮒騒ぐ沼辺窺ふ春の人	飯岡 敬子	校長の自転車通勤サングラス	岩田 勝	亀ヶ岳眺めみどりの日と思ふ	大谷 節子
海に出て遍路は青き沖を見る	飯田 醉亥	火玉より瑠璃の壺生る初夏の色	岩原 辰幸	点滴の外れし朝や五月富士	大貫 和夫
風とバラペトログリフを抱きしめる	飯田 芳子	更衣歩巾大きく歩み出す	岩本 弘	口笛の屋根の少年夏の月	大野 兼司
夥し芍薬の芽に朝日差す	池田タマキ	運転の君東京の春雷や	岩本 実佳	啓蟄や小さな池を一回り	大山みすず
懐かしや大笹に盛る衣被	池之上輝夫	白い絵と同じ朧の街に降り	植 朋子	カナリアの細き歌声青葉風	岡 まゆみ
夕薄暑魚一尾の跳ねにけり	石井 俊子	流れゆく雲の白さよ冬木立	上ノ山陽子	活花の水吸う速さ麦の秋	岡野 弘子
看護師の福寿草ほめ帰りけり	石川アキ子	夕立の匂ふ満員電車かな	内田 創太	飛行機の翼に夏の陽の撥ねて	岡本 秀子
喫茶店のさらさらカレー巴里祭	石川 春兔	時の日や行けたらいくといふ返事	内野 義悠	天水の光返しぬ夏椿	小川美津子
鹿寄せのホルンや春の飛火野に	石川 幸代	わかば風余白のおほき時刻表	内野 義悠	一ト雨の後の林や茸狩	小川美津子
夏木立よりジーンズの男来る	石川美恵子	青梅や出番待つ子の頬かたく	内山真理子	仔犬嗅ぐ上がりたてなる春の雨	奥村 芳弘
夕暮れや灯に似て夏蜜柑	伊丹 妙子	清張を読み返す夜や雪垂る	宇野亜治子	震へつつ北指す磁石鳥帰る	尾関 當補
モルモットの鼓動を抱いて春惜しむ	市川 紀子	さらさらと小松菜洗う水の音	江口八重子	笹ゆりや少女眠れる古墳丘	小田 妙子

この道をまつすぐ行けば白鳥座	小野 薫	荒海をまへに芭蕉布織られゆく	栗坪 和子	天瓜粉つくり話の上手な子	嶋田 奈緒
夜の新樹あなたはスバイかもしれぬ	小野 啓々	乳液の素直な白や夜の秋	黒木 淳子	枕木を渡すせせらぎ著莪の花	島津紀代子
着ぶくれてふはふはスフレ舌に溶け	小原けい子	蒼天の先はなに色揚雲雀	桑高 喜秋	スコップを軒先に立て除雪終ふ	島津 義浩
モノも来て描きさうな橋若葉風	加藤 梅夫	風呂ふたの上で猫寝る春浅き	上坂 秀治	三姉妹同じレモンのかき氷	清水 清伺
バラソルや豚ひれ二枚買ひ足して	加藤 政美	同窓会の幹事の名まえ茄子の花	河野裕美子	夏帽のリボン違へて姉妹	清水ゆみ子
夏木立寺のお守り良く売れて	金澤 恵子	灯を消してビバルデイ聴く春の風邪	香山 直子	とまり木をすこし詰めた柄長かな	清水 良郎
遠足の話の尽きぬ夕餉かな	神根 信	鳥もまた水辺を恋うて苑薄暑	小柴 智子	雨過ぎて空の青さよ楠若葉	庄瀬 武
水仙花炭焼き小屋に煙立つ	亀山 公一	日曜のパラグライダー植田澄む	小嶋トシコ	ロードバイク落花の風をくるわせて	白井 正枝
躑躅てふ漢字宮崎美子さん	川崎 和子	卯の花や上り框の黒光り	小塚 信江	母の日や埴輪の巫女の首飾り	新海 博司
葬送の潮鳴り冬の虹かかり	川崎 和啓	母の忌や箱根空木の紅濃くて	後藤 房子	水中花市場の中の珈琲屋	新谷 辰雄
手鏡の空透明に秋のこゑ	川崎 和啓	夏雲や水平線よ拉致の子よ	小屋 幸保	懐の野良の子猫に子守歌	杉山 公宏
夫の声ふりむけばただこぼれ萩	川崎 康子	陽炎へ空ベビーカー押す妊婦	子安 啓司	白服ふわふわ修学旅行生	迪方 温啓
アカシアの花散る丘にミサの鐘	川村 幸子	再会のコーヒーはモカ風薫る	齋藤智恵子	物置のよく片付きて柿若葉	鈴木伊都子
子燕のことも一行農日記	岸下 庄二	夕焼の裏には行けぬ競走馬	佐藤 無風	武蔵野や象の花子に花ふぶく	鈴木三光子
せんせがっこいやになつてんえこの花	北村 薫	うららかやひよこの菓子に雌雄なし	佐藤 廣枝	裏窓に墓の混み合う暑さかな	鈴木 仁
天守閣は遠くあれかし夏帽子	衣川 由美	手を口にくくと笑ふ子風薫る	佐藤 征子	新任の挨拶の辞や青葡萄	鈴木千佳子
東京で山羊飼ふ人やうらけし	木下 涼薫	はらわたに痛宿りけり青嵐	椎名 貴寿	ジャガ芋の花咲き実る恋心	鈴木 木香
遠足の列に遅れて棒振る子	木下 涼薫	春の星部活帰りの子の寡黙	塩野 恒子	春待つや老いて小さき膝を抱き	鈴木 正子
母の日や土方現場で逝きし母	君塚 房子	えんどうの花や関東ローム層	泉 耿介	烏骨鶏二羽蹲る木下閣	鈴木美恵子
行く春や笛の名手の息遣ひ	京極和佳子	秋の蠅残る力に陽を攔む	篠 信子	百合ひらくズボンの裂け目縫ひ居れば	須田亜希子
かの人の無言詣と擦れ違ふ	桐畑 佳永	小綬鶏や告別式は十三時	芝田 太	下校子の飛び込んで行く花吹雪	諏訪美和子
夜の更けて月の明りの四人部屋	國友 弘子	鉄棒をた走る蟻の気迫かな	芝田 太	母は白私は真赤な薔薇が好き	瀬川 節子
園児等の誰も大声夏来たる	久保登志子	迷いきし蟻一匹のつくる影	島崎多津恵	ふかし諸兄と競ひし力瘤	関 千年雄

トーストのバターのきらり初夏の風	関	雅己	啓蟄や鶏走る幼稚園	出口 重夫	しからずに牛の歩むを待つ代田	浜辺 功
こんな日は武蔵野恋し秋時雨	関根 瞬泡	夏つばめ母校が俳句甲子園	土居 直子	妻の忌や明るき海と七変化	林 滋	
手を広げ大きさ競ふ蛇の後	高瀬 雅彦	清しきは馬の瞳よ風光る	戸田ゆき子	病院は時計ゆつくり花曇	原田 幸子	
予後の指ゆつくりゆつくり髪洗ふ	高田 睦子	おぼ白寿三月三日誕生日	豊田 民子	剃きたてのそらまめの色ワンピース	原田 幸子	
蒲公英の絮や平成終りの日	高野さつき	読みさしの独歩葉擦れのハンモック	長岡ルリ子	つぶらかな小犬のひとみさくらんぼ	張替 和子	
玉虫の飛び来る部屋の夕明り	高橋 トシ	青葉木菟げやき一樹に月の影	中川すなを	大夕焼まだ帰り来ぬレース鳩	久田 正己	
石灯籠穴を覗けば春の街	高橋 利之	誰一人急がぬ旅や蝸牛	中島 保	切手買うその道のりも春になり	久鍋得利子	
新緑へ傾げりわれも吊革も	高原 晴子	旅先で子に書く葉書夜の秋	中島 優子	初夏の扉は軽し美容室	毘舍利愛子	
流星やサンドバッグを打つ男	高柳 ちゑ	しんがりやチューバの少女緑陰へ	中田 良一	畦に出て機嫌よき子やすみれ摘む	平井小枝子	
林中の定席父の夏帽子	滝浪 武	呼び水のきしむポンプや蝶の昼	中根 武郎	早春のどこかで水を掬ふ声	平井 泰誦	
薫風に乳房ゆらりと牧の牛	武井 猛	眠る児のずしりと重き花疲	中根 武郎	力石腰をおろして新樹光	平野 孝純	
兜太の碑桜紅葉を素手で掃く	武井 猛	りんご受く小さきてのひら二つ寄せ	中村 頌子	じゃがいもの尖 <small>とん</small> がっている雌蕊かな	福島 朋子	
春泥の乾きて上野駅に着く	武井 禎子	蜜豆を食べて老後の無計画	西住三恵子	消えてなほ飛行機雲や桜桃忌	藤川 和男	
そのままに古き犬小屋散る桜	竹内 友子	花の旅でんと居ませり晴男	西谷 笛秋	万緑やいす十脚の保育園	淵上 淳乎	
老幹の樹皮のささくれ春の雪	竹下喜代子	飾りもの身よりはづして蚊遣香	西村 久子	地震八年松島湾の花明り	古川よし秋	
山城は石垣ばかり朴の花	武田 ミツ	晴明の光散らばる江戸切子	額田 昌安	家づとに藻屑蟹とはけつたいな	不破 元之	
草笛の少年蒼き腕して	田中テル子	昇る陽に腸の透くなめくじり	額田 昌安	コロッケ屋の列しんがりにあつばつば	星野いずみ	
「免許証返納」と笑むサングラス	田辺 秋花	能書きのびつしり京の筍よ	野沢 幸子	玻璃過る鳥影強く夏は来ぬ	大木 宙	
船べりに舟寄せ来るやマンゴー売り	谷口 畔水	花見莫塵巻きて同級会閉じぬ	野田 美子	鬼の棲む山の麓の蓬餅	柘野 雅憲	
眩きをマイクが拾ふ曳山祭	谷中 明子	すててこの親父の庭や百の鉢	長谷部容子	指の傷舐めつつ蕨探しをり	柘谷 栄子	
青嵐蜂蜜色の眼に出逢ふ	塚田 風子	川底の銀鱗春を射返せり	花田 浩子	一笑にふされて春のちぎれ雲	町田 朱美	
団栗の本気で落ちて弾みけり	角田喜代子	何見ても君思ひ出す大夕焼	濱田 朋子	幼子のくせ毛のあたま夏木立	松浦知恵子	
たんぽぽはたんぽぽ幾ら踏まれても	鶴田ちしほ	遣る気ない兎にたし算の桜貝	浜野 稲穂	春愁や暮れゆく山の色に似て	松岡 孝子	

福耳の子のイヤホンや青き踏む	松田 明子	夏蝶の疾し武蔵の国なれば	矢野みはる	鳥語降る野辺の地蔵に風涼し	宇野みさ子
パンジーや天然水のラッパ飲み	松本 明子	横丁の店のこの席生ビール	山崎史保子	自転車の空気たつぷり青野行く	梅原 清音
舟でしか行けぬ神社や新樹光	萬年 和子	貫い手のつかぬ子猫の大欠伸	山崎マサ子	しんちゃんの名字は野原山笑ふ	遠藤 克子
川風や湯治の人と見る花火	三浦 初音	彦星の櫂の雫かけふのあめ	山田 収一	野ぶどうの熟してあたり四十九日	太田かつ子
青空や水天宮の白日傘	箕輪 京子	新樹光帝釈天は象に乗る	山田 節子	肺青むまでネモフィラの丘歩む	大塚とも子
雀来て遊ぶ棕櫚葉も小暑かな	三原 利子	フェンスより顔出す秋のきりん草	山野 節子	武蔵野や草木の匂ふ夏の夕	奥山 功
焙り海鞘好みし兄貴今日忌日	三矢 泰彦	リハビリの友へ草餅たづさへて	山本 歌子	花の下野点の席に犬もいて	小田富美子
記念樹を檸檬と決めて苗木市	宮川千賀子	朧夜のケアハウスよりブラームス	山脇香代子	帰省子のまつしぐらなり野の小川	小野トメヨ
そうだなと言う人のいた鍋の夜	宮崎美智子	令和元年夏うぐひすの高声かな	吉岡 亀一	駆け出して止まる鶴や春の土	柿沼 洋子
ゆづり受けし螺鈿の文箱天の川	宮澤 和子	今日立夏素足もて踏む豊かな	吉田 美枝	武蔵野の木立に夕日桜桃忌	加藤 梅夫
牛乳呑む緑ヶ丘の鯉のぼり	村上 重夫	バカラに注ぐ冷酒一献多佳子の忌	吉田 芳子	花野行く皓齒まぶしき娘たち	加藤 哲
渦汐にぐいと舵切る瀬戸の春	村田 進子	雑踏のなかを夫の来大きくさめ	吉本由紀子	春暁や鴉の声の野太くて	加藤 貴子
緑さす落雁花のごとつまむ	村田 寛文	一幅の達磨に対す夏座敷	米倉 和美	試歩の杖下ろす茅花の白さかな	川崎 和子
桐咲くや夜来の雨の上がりゐて	村橋 克雄	初夏や皿に描かる鉄線花	和田 郁江	鳥の恋野にひとすぢの煙立ち	川崎 和啓
足裏の砂はさらさら夏きざす	百田登起枝	アフリカの少女の摘みし薔薇を買う	渡戸 道子	花野花野腕が翼になつてゐた	川崎真樹子
都会の子大き筍掘り上ぐる	森 靖子	かげろふの向かうの人へ逢ひにゆく	渡辺 輝夫	草青む野に一本の山羊の杭	木下 涼薫
薔薇深紅大人といふは退屈な	森 祐司	秘密基地へ風の抜けゆく端午かな	渡辺 美晴	わが眉を風の掃きゆく春野かな	木原 登
蒼蒼と風の大樹や更衣	森本幸比古	……………題詠「野」……………		野の色にほろと崩るる枯蟪蛄	蔵 堯子
皺のないハンカチが好きパンが好き	森山 健一	大の字になりし野原やめじろ来る	青木 素子	野良猫や野武士のやうな恋をして	神戸 千寛
昼の星仰ぎしことも余花ひとつ	屋代 義男	ありふれし草にもつとも露光る	飯塚 柚花	散策の野に春耕の影多し	小平 貞
春風に駢蕩として物忘れ	安武 豊	野いちごを引き寄せつまむ兄いもと	市川 紀子	ひざついて牛の反芻大花野	後藤 玉喜
石榴の実裂けて始むる旅仕度	柳川 恵連	お遍路さん行くと野を指すバスガイド	伊藤 妙	化野の少女が逃がす白き蝶	小西 瞬夏
けふの詩は薫風の繰るページより	柳澤 友香	指籠に蛍あそばせ野の微熱	内山真理子	女教師の面影野蒜青あをと	小山恵津子

野薊の先に灯台青い空	近藤 好廣	武蔵野に尾長の似合ふ秋日和	津田 隆	野ぶだうの蔓くると梅雨に入る	森 祐司
あの恋を忘れてやろう野萱草	ざがひかる	さへづりに鈴のひびきや大きな野	露木 伸作	野兎跳ねて春満月の上がりけり	茂呂 典正
産後鬱抜け出て春の野へ一步	佐藤 志乃	寒柝に武蔵野の星光りだす	友田しげを	上水に独歩の孤影枯木立	屋代 義男
一枚を脱いであたたか野も山も	佐藤 孝志	愛してるよ今朝は青鷺啼いている	中川 湖洲	野ばら咲く未明の老兵あるやうな	山田 節子
つつじ野や女二人の猿回し	佐藤 敏文	野の花を摘む指先に夏の露	中島 優子	雲割れて牛の瞳も野菊晴	山本 覚
野茨の花にほつほつ雨のくる	澤田 れい	駒放つ阿蘇に青野のある限り	西山 勝男	花豌豆嬰見せに来る磯畑	山本 時子
野っ原に弁当拡げ春惜しむ	篠原 枕流	卯月野やサスペンダーの兎が走る	秀遊	鳥語木語満つるまはらの野蒜かな	湯田 一秋
野苺を石路の葉に摘む山路かな	芝 由雄	下萌に置かせてもらふふ太き尻	風街ゆう子	野火の香をまとひし夫や茶碗酒	湯田 畊道
武蔵野の冬の櫂となりにけり	志村 美好	野の川は大き目印つばめ来る	平井 萌黎	武蔵野を駅から歩く独歩の忌	吉田 武夫
野に出でよ走つて飛んで子供の日	鈴木 静子	野良猫に餌をやる散歩ほととぎす	平賀紘太郎		
原発の夏野を近づき来る背鰭	鈴木 仁	雑踏の裏の武蔵野竹落葉	福島 朋子		
泥濘にまみれる野草春の雷	鈴木 眞嘉	瞬きを交はす野川と銀漢と	藤岡 定子		
道をしへ野外授業の子らがくる	鈴木美恵子	星原へ行く道しるべ桐の花	船津 信子		
青嵐や野面掠めて飛ぶ鴉	角 雅行	晴れわたる裾野に富士の黄たんぼほ	古瀬まさあき		
遠足や恐竜の歯の化石かも	関 美奈子	湿原の水音やはし春ひらく	堀米 澄子		
一人来て卯月曇りの山野かな	相馬マサ子	土筆野や頬杖つく子寝転ぶ子	榎本 俊明		
武蔵野の若葉の風や退院す	高橋 澄子	フリスビー大きく逸れて夏野かな	さとう菓子		
青空に浮雲一つ野の桜	竹内 友子	木下闇から躍り出て野外劇	水上れんげ		
この先は皇子の墓所や野に遊ぶ	田中 公子	野仏の手にゆすらうめ置く園児	宮川千賀子		
柚子たわわ熊野古道へ歩きけり	田中テル子	雲の峰外野を走る補欠の子	武藤 洋一		
振り向けど叫べどひとり大枯野	田中 俊	野の鳥に畑の夫婦に春日満つ	持田 敏朗		
絶望か野心か素足岸の人	塚原味紀枝	野良仕事一服雉の恋を見て	百瀬 信之		
野晒しのバイクに休む雀の子	津田 京子	ひなげしの野に点景のふたりかな	百田登起枝		

小島 健 選

特選

少女らの真白き翼 夏来る 北海道 藤田 美和子

ウーン、「少女らの真白き翼」ねえ。腕などではなく「翼」と詠んだのが、感性・感覚のよさでしようね。この繊細かつ大胆な、そして清潔な詩情に拍手！

ほら、少女らの明るい未来も感じられるじゃありませんか。これも少女への深い愛情ゆえ。でかした！

てふてふを追ひて子等みな蝶となり 埼玉 岩本 弘

これまた、何という自由奔放な作品でしょう。蝶々を追う子等がみんな蝶となる、だなんて。まさしくファンタスティック（幻想的）！このように詩は虚実の間にも宿ります。

それにしても、いいなあ、子等がみな蝶と化すこんな世界。作者の柔らかい詩心に乾杯！

……題詠「野」……

野兎跳ねて春満月の上がりけり 茨城 茂呂 典正

ああ、跳ねた野兎に呼応して上った春満月の何と粋なことよ！野兎と春満月の中で餅搗きをしている兎との友情も垣間見られますね（？）。

この自然が背景の躍動感に満ちた詩情がGood！それを支える断定の勢いある切字「けり」も憎いなあ。

秀作

かの世指しこの世に返す踊の輪 三重 伊藤はじめ
 浮世絵のうちわの扇ぐ江戸の風 沖繩 砂川 節子
 図書館にはり紙多き四月かな 秋田 高橋 弥生
 人が好き焼肉が好き生身魂 東京 大川 千草
 薫風に老の海馬よ甦れ 神奈川 岡崎 陽子
 江ノ電の掻き鳴らしたる軒風鈴 愛知 城山 憲三
 夾竹桃義父は戦を語らない 埼玉 平川らん子
 人の世に蜜蜂蜜を集めけり 千葉 岡田 春人
 白服ふわふわ修学旅行生 神奈川 迪方 温容
 華やぎは水にもありて花見船 東京 大石 坦
 ああこも空き家とならむ草いきれ 埼玉 谷 俊和
 隠岐に生きる万にそそぐ初音かな 長野 平林 佳治
 躑躅咲き庭を大きく膨らます 熊本 園田 和子
 義民碑へ青田の風の届きをり 滋賀 田中 茂三
 雪溪がロープウェイに迫り来る 東京 田村登代子
 老鶯の描きしごとく鳴きにけり 神奈川 前島 康樹
 辣菰漬ける年年甘くなりけり 神奈川 坂本多賀子
 桜桃忌あまりに空の青すぎる 東京 藤岡 定子
 コロッケ屋の列しんがりにあつぱつぱ 神奈川 星野いずみ
 打つよりも外に追ひ出す蠅叩 千葉 毘舍利愛子
 ……題詠「野」……
 草原へ静かに散れる捕虫網 東京 大西まりゑ
 駒放つ阿蘇に青野のある限り 福岡 西山 勝男
 長老の号令一下野火放つ 兵庫 岸下 庄二
 下萌に置かせてもらふ太き尻 福岡 風街ゆう子
 光る野に蝶の耀き加はりぬ 神奈川 高瀬 雅彦

佳作 掲載は氏名五十音順です。

尼様の注ぎくれたる甘茶かな	相沢正志齋	わが郷を湖底に山は緑さす	岩崎 幸邦	鱗粉のこぼれて蝶の最後かな	大山みすず
勿体ないああ勿体ない花吹雪	相原 一枝	葉隠れの空蟬光る立石寺	岩田 勝	一片の落花に土の新たななる	岡田 邦男
歳月の溶ける琥珀の梅酒かな	赤羽 克己	老いてなほ迎へる年の新しき	植木 英雄	走り根の海へと延びて八月来	岡野未由子
念入りに眼鏡拭きたる梅雨の明け	朝川 晴也	その螺旋空まで届け文字摺草	上田 雅子	大皿に波のごとくに冷素麵	奥田 雅美
コップ酒供へる彼岸の屋敷墓	安積 邦夫	遠足の声体内に盧遮那仏	上村 佳与	名を決めて産声を待つ月涼し	奥村 利夫
生国の村の名の酒年酒とす	阿部 和子	揚花火句読点なき時間かな	内野 義悠	柿若葉赤子の指の透ける如	奥村真由美
イチローも羽生もレジエンド文化の日	新井 忠彦	フリスビー追はぬ愛犬沖縄忌	内野 義悠	チューリップおとき話を語りだす	奥村 芳弘
うららかや武装を解かぬ仏たち	飯野 定子	まつすぐに来る朝風や大青田	梅田ひろし	呼び合へば木霊かへるや茸採り	尾関 金義
病棟に竹馬の友や春よ来い	五十嵐良一	母の忌や浴衣の湖を濃くきかす	梅原 清音	おいそれと道をあけてはくれぬ蝦蟇	小野 麻利
父と子の縞のTシャツ町薄暑	生馬 明子	少しだけ傾く地軸亀鳴けり	江川 和彦	膝の猫重くなりたる日向ぼこ	柿沼 洋子
たんぼぼに囲まれ無縁仏かな	池田かづ江	定年ぞ妻の手をとり青き踏む	江崎 清	外遊び足りて幼なの大昼寝	笠原佐千子
異国語のさざめく富士の山開き	石井 東泉	この先の五年を思ふ更衣	榎本 節子	老鶯のこゑ響きあふ古利かな	梶田 遊子
鯛のやつて来さうな怒濤かな	石川 明	堰堤や草躍らせて春の水	遠藤 克子	薫風や今日は五千歩目標に	加藤 貴子
皇后のドレス鴉色風薫る	市川 紀子	ふんばつてふんばつて尚あめんぼう	大川 千草	夏めくや阿蘇高原に牛の声	加藤 忠
アスファルトに白緞帳のごと夕立	市丸万由美	大皿に盛る夏野菜ジャズの如	大須賀道子	柿若葉旧家の築地今もなほ	加藤 申女
傍らに語る人ゐて春の宵	出田 清子	長き夜や指に纏はる栞紐	太田 喜子	田植水豊かに棚田から棚田	金子加津久
梶子の白の溶け出す朝の雨	井上 宣孝	夏来るスパッと開く平方根	大塚とも子	みどり児に新語ひとつや初つばめ	加納 金子
田水張り棚田一気に動き出す	井上由美子	鶴引きて残りし池の真つ平ら	大西 昭子	剣道部の声かき消して青嵐	蒲谷きよみ
万緑や地図を片手に秘境駅	今泉真紗子	万緑や太き走り根踏み越えて	大西まりゑ	各々に結び方あり笹粽	上村富美子
足元を雀隠れの同祖神	今岡 梢	点滴の外れし朝や五月富士	大貫 和夫	苗売の色どり並ぶ露店市	川崎 雪華
燕の子銜える虫のあふれそう	今関 浩子	ブロンズの象のはな子とラムネ玉	大沼 遊山	燕来る旧街道の家敷町	川副 康孝

宿坊の杉亭々と冬の月	河田 公枝	帰りに買ふよと躲す大西瓜	子安 啓司	若冲も恐れて描けぬ羽拔鶏	シノダアツシ
竹の子の伸びて少年変声期	川村 幸子	園児等の笑顔まんまるシヤボン玉	金 道博	西日さす税の上がる美濃の町	芝田 太
青空のどこからとなく囀れる	岸本 悦子	濃尾平野麦を焦して大落暉	斎藤 惠葉	蜂の巢の班長宅に三つほど	嶋田 奈緒
弓を引く父片肌の白上布	北浦 敏子	新緑の泡吹くごとき勢かな	斎藤 澄子	新樹より飛び出してくる都電かな	清水 克代
花菖蒲静かに雨の降る日かな	北浦 敏子	竹林の木洩れ日そよぐ夏座敷	斎藤千寿子	夏帽のリボン違へて姉妹	清水ゆみ子
流れ星地球へ銀河のラブレター	北阪 英一	涼しさや伏流水が砂を吐く	齋藤 伸光	新しきスニーカーなりたんぽぽ黄	清水 葉子
秩父嶺に祝詞滲みゆく山開き	北原 信夫	夕刊の薄くなりをり梅雨じめり	坂本 徹	看板も塗り変え富士の山開き	志村 芳子
蟬時雨学徒出陣壮行地	衣川 洋子	膝小僧いつもかさぶた麦こがし	相良 研二	茄子畑葉は生き生きと花守り	進藤外喜子
免許証返納帰り初音かな	木下 嶺生	卒業子手話のせんせいありがたう	佐久間清観	連休を里帰りして柏餅	杉本恵美子
名を付けて子には宝の兜虫	楠 暢太	病窓の朝な夕なの桜かな	笹野 青陽	物置のよく片付きて柿若葉	鈴木伊都子
古池や蛙の声は牛の声	國武 浩之	おとがひの美しき人ゆく春日傘	佐藤育久子	裏窓に墓の混み合う暑さかな	鈴木 仁
丸き背の白寿の母の目借時	久野 幸俊	旅の間よ大根茎立つ台所	佐藤 稲子	緑陰の先に明るき社かな	鈴木 節子
園児等の誰も大声夏来たる	久保登志子	恋遠し草矢まつすぐ放てども	佐藤 志乃	月涼し歩き始めるモアイ像	鈴木 武
禅寺の巨樹を揺るがす蟬時雨	倉持 正紀	山影の及ばぬところ梅早し	佐藤 孝志	待ち人が来て噴水の高くなり	鈴木 正子
鯉職山間集落勢いけり	源通ゆきみ	うららかやひよこの菓子に雌雄なし	佐藤 廣枝	ヴェランダに腹見せる蟬雨の朝	鈴木 眞嘉
集落もダムの底なる夕螢	小池 成功	八畳に眠るやや児や青田風	佐藤 正博	青嵐湖面つぎつぎ裏返し	鈴木美恵子
軋み曲る路面電車や街薄暑	小沢 芳治	菖蒲田に立てば絵巻の中かとも	佐藤ます子	夏立つや枝しなひたる大櫓	鈴木美智子
始まりと終わりを探す蟻の道	小島美佐子	的はずしながらも生きて桜桃忌	佐藤 羊子	立ち漕ぎのふらここ天に飛び出しぬ	鈴木 優子
どくだみの夜には夜の花明かり	見玉 君子	露天湯のざんぶと溢れ牡丹雪	佐野 月子	反核のヘルメット拭く生身魂	砂山 恵子
開脚の天の橋立雲の峰	見玉 憲文	草を引き一人暮しを守りけり	佐野 延子	催馬楽のはねたる社青葉木菟	角 達朗
耕の機械と鋤を使ひわけ	小塚 青楓	四万十の魚を膳に夏座敷	座間 英幸	下校子の飛び込んで行く花吹雪	諏訪美和子
漆黒の眼逸らさず源五郎	小西 瞬夏	亡妻や虹の端から降りて来よ	澤井 国造	虹の橋渡れば逢へるかも知れぬ	瀬川 節子
北窓開く自画像のこる子供部屋	小林たけし	痲癩を空に放つや雲の峰	塩川 隆三	父の忌や泰山木の花の盃	瀬川 節子

遅れくる通学バスへ雪つぶて	関 千年雄	呼び水のきしむポンプや蝶の昼	中根 武郎	献血に並ぶ若者新樹光	原田 咲子
静かさや皆着ぶくれの待合室	高田 貞子	まつ先に象を見に行く子供の日	中村 頌子	大夕焼まだ帰り来ぬレース鳩	久田 正己
満天の星と交信虫時雨	高柳 ちゑ	朝桜膨らみて行く村の音	西川 明美	ふる里の海に抱かれにゆく水着	毘舍利愛子
林中の定席父の夏帽子	滝浪 武	咲ききつて音なくくづれ白牡丹	西川キヌエ	この空は底なしの沼梅雨に入る	毘舍利道弘
反骨の山塊を抱き夏の雲	滝浪 武	難聴の爺にもとどく初音かな	西川 順子	水口守り夏百日の労に老ゆ	福井 英敏
朧夜の猫カフェの猫やはらかし	武井 清子	蜜豆を食べて老後の無計画	西住三恵子	身の丈に合いし話題よ日向ほこ	福田ミドリ
薫風に乳房ゆらりと牧の牛	武井 猛	向日葵に負けぬ園児の声ひびく	西村 久子	緑蔭の献血バスに入りけり	藤根 豊
兜太の碑桜紅葉を素手で掃く	武井 猛	飾りもの身よりはづして蚊遣香	西村 久子	敗戦忌虫のなく腹忘れをり	文梨 弘子
老いの足泥の引つ張る田植かな	武市 宣子	眠る子にそつとはづしぬ軒風鈴	西村 久子	隠り沼の水の重さよ糸とんぼ	森 由布子
山城は石垣ばかり朴の花	武田 ミツ	ゴンドラの影ひく山の青葉かな	西村 久子	一人寝のテントをたたみ岩魚釣	不破 元之
老松の臥龍に撓み緑立つ	田中 千穂	朝刊を仕舞い決め込む朝寝かな	額田 昌安	四十年勤めあげたる朝寝かな	逸見 彬有
早朝の吹奏響き五月晴	田野咲美子	新緑に輝いてゐる隠れ沼	能田 孝昌	夏立つや水奔放に用水路	堀米 澄子
牡丹の闇の重さに散りにけり	塚本 治彦	種牛の赤き眼や草萌ゆる	能田 孝昌	制服のプリーツくつきり春の風	松浦知恵子
真間の井に万葉の月昇りけり	露木 伸作	能書きのびっしり京の筍よ	野沢 幸子	よく匂ふ土に物種放ちけり	松尾 一子
玉子焼きほどの明るさ春の夕	鶴田ちしほ	水旨き里に住み古り古茶新茶	野尻 瑞枝	月下美人月の光をはね返す	松木 溪子
風光るスクールバスの停留所	寺島 美子	草笛や我が初恋のうすみどり	萩原 豊彦	櫛の木の峰走りたる若葉かな	松島 孝幸
梅花藻の川底に風あるごとし	寺田 栄子	聖五月昔恋せし人病める	橋場 之廣	福耳の子のイヤホンや青き踏む	松田 明子
風や陽や脳いきいきとみどりの日	徳田しげよ	桑苎昔はみんな飢ゑてゐた	橋本 久子	日盛の腕逞しき少女かな	松山 真弓
初螢一番星と出でにけり	友田しげを	交差点鎖骨涼しき女たち	長谷川和子	横浜の白き客船夏近し	三浦 茂
草庵へ飛び石美しき春の雨	中込 儀一	点滴の窓辺に今日も小鳥来る	長谷川京子	川風や湯治の人と見る花火	三浦 初音
夏日影ランドセルにも慣れてきて	中島 貞夫	すててこの親父の庭や百の鉢	長谷部容子	万緑に過疎の一村没しけり	三浦 一志
旅先で子に書く葉書夜の秋	中島 優子	手造りの草餅草の筋多し	羽立 和子	子の指にあまる割箸心太	三浦 美苗
帰省子やわが家の犬に吠えられて	中島 優子	しからずに牛の歩むを待つ代田	浜辺 功	山藤や行くて楽しき予感して	右田 捷明

帰省して姉妹の若さ確かめり	三原 利子	羽化のごとほぐれそめたる白菖蒲	山崎マサ子	誰が袖をゆらしてきたか花野風	伊藤 絃美
参道に研屋来てゐる桜かな	宮内 信子	春愁やブラックホールのあまたあり	山田 節子	幼稚園バスの児放つたんぼ野	井上 昌子
銭湯の煙突古りぬ夏の月	宮澤 和子	大阪城正眼に仰ぎ入学す	山田 浩子	ドローンの如く野を行く揚羽蝶	井上 正敏
花吹雪誘わるるよう永遠の旅	三輪 昭子	ゆたかなる弥陀の耳朶あたたかし	山田 凍崖	畑仕事終える野道やおぼる月	今田 シゲ
エイティーム人の込み合う五月来る	向井 昭子	母の日や足踏みミシン修理する	山本カヨ子	古郷に顕彰碑立つ大枯野	岩波 輝征
背もたれが頼もしき椅子新茶汲む	向井 麻代	朧夜のケアハウスよりブラームス	山脇香代子	武蔵野にのこるせせらぎ螢飛ぶ	岩野 記代
走り根の鷺づかみして大夏木	村田 郁夫	梅漬の妻の手秤狂ひなし	湯田 暁道	自転車 <small>の</small> 空気たつぷり青野行く	梅原 清音
退屈な河馬の水浴び薄暑かな	村田 進子	雨あがるページをめくるやうに夏	吉井美代子	身の籠はずし故郷の野に遊ぶ	戎谷 久代
根付きたる苗の色よき走り梅雨	村橋 克雄	秋雲や漁港出でゆく船の笛	吉岡 昭子	武蔵野の夕日でかいぞ麦踏めり	大川 千草
諸役みな退いて今年の花見かな	村橋 克雄	白鼻心出入りの空家柿の花	吉川 元二	真新のスケッチブック青き踏む	太田 喜子
雲雀落ち武蔵野の空しづまれり	持田 敏朗	賛美歌の流れ来る丘風五月	吉積 漫歩	乳牛の反芻つづく青野かな	大山みすず
草の絮昼の電車に迷ひこみ	望月 郁江	吉野山静かに余花の終りけり	吉原 誠之	縄電車花野に車輛置いて来る	奥村 利夫
足裏の砂はさらさら夏きざす	百田登起枝	銀輪の光る湖岸や若葉風	米崎 功	花野行く皓齒まぶしき娘たち	加藤 哲
風薫るまだ不揃いの吹奏部	森 孝枝	花吹雪女優のやうに歩みゆく	米田 陽子	試歩の杖下ろす茅花の白さかな	川崎 和子
七曲がり登り峠の清水汲む	守田 君江	亡き妻の影としばらく踊りけり	若林 正人	薫風や膝折りて見る山野草	川村 幸子
吊橋のバンジージャンプ青葉風	茂呂 典正	八重山の島のあけくれ蝶渡る	若林 正人	よちよちの子を野へ放ち蝶の昼	衣川 洋子
万緑の中にて五感研ぎ澄ます	諸貫 節子	良書得て雑踏涼し吉祥寺	和田 章子	美しや緑野の果の青浅間	木原 登
眼科医を出て校庭の新樹光	屋代 義男	父の日やこの頃涙脆き父	和田 強	武蔵野に国分寺跡緑立つ	久保田敏子
姉が吹き妹が追ふしやぼん玉	矢内とき子	葱坊主畑の主となりにけり	渡邊 貞夫	つくし野に臨時停車の縄電車	源通ゆきみ
橋梁を潜る鳶の背風光る	山岸 嘉春	かげろふの向かうの人へ逢ひにゆく	渡辺 輝夫	武蔵野へほぐして速し花筏	紫 雲 英
工事現場朝礼の声響く夏	山際 玲子	……………題詠「野」……………		野遊びの草の輪飾り置き去られ	小堺 政彦
水遊び遊具の揃う婆の家	山口 勝	静かなる野鳥の森や初日影	あまの樹欄	原つばの風の飛びつく夏帽子	小嶋トシコ
にぎはひを抜けて緑や泉湧く	山口 由美	たんぼの野に遊ぶ子ら翼欲し	鉛矢キツ子	野遊びの指先みどり子も母も	後藤 明美

ひざついで牛の反芻大花野	後藤 玉喜	寒栢に武蔵野の星光りだす	友田しげを	草餅のありて厨は野の匂ひ	安井 武
野茨や並んで走るスニーカー	齋藤智恵子	母の日や野の花一輪母の手に	内藤 正人	野遊やひつつき虫と帰り来て	山際 玲子
武蔵野の森はたつぷり夏の雨	坂井 正巳	武蔵野の輝く野辺や夏来る	なかしまあゆむ	銀輪の走る高原草若葉	山口 勝
霜柱ふむ武蔵野の一窪み	佐々木志う	湧き水の音の涼しや武蔵野路	沖野 良	輪になつて遊びし頃や草の祭	山崎史保子
産後鬱抜け出て春の野へ一步	佐藤 志乃	げんげ野に大の字空を独り占め	中山 幸子	土筆摘む友とはぐれし野の起伏	山高江津子
野火走る阿蘇の五岳をけづらせて	杉本恵美子	軽やかに影先に立つ野の遊び	西川 明美	野火の香をまとひし夫や茶碗酒	湯田 畊道
つくし野に子等の歓声風渡る	鈴木 昭子	野あざみや女工の越えし峠道	能田 孝昌	野に立てば人みな優し麦穂波	與語 和彦
野に出でよ走つて飛んで子供の日	鈴木 静子	春の野を行けば詩人となつてをり	能田 孝昌	青胡桃日差しうつろう那須野かな	吉井美代子
道をしへ野外授業の子らがくる	鈴木美恵子	ルーペ手に野草観察風薫る	野尻 瑞枝	野ばら咲く昨日にまさる子らの声	吉岡 昭子
田植機や野道に泥を落し行く	関 忠男	草茂る荒れ野に畦の名残りかな	毘舎利道弘	急がずに待とう枯野の青む時	米崎 功
カウベルのひびく浅野や霧晴れて	高柳 ちゑ	このあたり野原いつばいうらけし	比留間加代	武蔵野の風となりけりしやぼん玉	若林 正人
武蔵野の青空分けて揚雲雀	武井 猛	春野ゆく似たもの同士腕組みて	福田ミドリ		
もう何も捨つるものなき芒原	武井 禎子	草萌の藤村旧詩口遊ぶ	麓 勝子		
青空に浮雲一つ野の桜	竹内 友子	夏空や風吹きぬけて草千里	森 由布子		
あちこちで風読む勢子や野焼晴	竹下 和宏	全力で夏野を駆ける絆創膏	星野 麻子		
立ち眠る野生馬撫づるあいの風	竹本 孝	フリスビー大きく逸れて夏野かな	さとう菓子		
曲がるとき電車傾く夏野かな	谷口 一好	げんげ田はあそび場なりし昭和の子	松井 さだ		
野ねずみの穴念入りに畦を塗る	田村 陽子	遠き日の野遊びの声セピア色	松田 明子		
草にある匂ひそれぞれ野に遊ぶ	為成 央子	月山の霽れて花野に陽の射せり	松久 茂嘉		
頃合ひに枝を杖にし夏野行く	知念 哲夫	幼子の両手に追われ野に遊ぶ	宮坂美恵子		
すぐ両手ひろげ走る子花野かな	露木 伸作	春の野に憩い補聴器掛け直す	村田 進子		
野を染めて泡立草は背を競ひ	出島 達子	風が巻き風が広げて野焼の火	村橋 克雄		
風のうねり草に残して野分過ぐ	徳田 京	野の鳥に畑の夫婦に春日満つ	持田 敏朗		

鈴木 章和 選

特選

秋晴れて俳句手帖の頁一 神奈川 青山 あじこ

好天氣の今日は身も心も爽快。とびきりの吟行日和です。目的地はかねてより決めてあった、あの場所。いざ、ペンとまっさらな俳句手帳を取り出して、最初の一句をしたためます。ちよつとためらいながら、しかし少し気取って記した一句、「秋晴れて…」。一ページ最初の句としては申し分なしです。

新樹より飛び出してくる都電かな 埼玉 清水 克代

みずみずしい若葉をつけた初夏の桜や櫂をぬけて、ちんちん電車がやってきます。緑蔭から、五月の木の匂いと街の空気をまとって進んでくるのですが、それを囁目、「飛び出してくる」ととらえたところが秀逸です。初夏の光の発散、脇を走る車の音の薄暑につつまれて、うきうきと電車の到着を待つ作者です。

……題詠「野」……

野遊やひつつき虫と帰り来て 大阪 山際 玲子

野山を歩く。新鮮な空気をたっぷりと味わって、家に帰って気がつく、上着、ズボン、靴下にもひつつき虫が点々といびいてびっくりします。ひつつき虫とは人や獣にくつついて移動する草の実のこと。あちこちに仲間をふやそうとしているのです。あれっ？作者は驚きながら、今日の野原や林での一日を思い返しています。

秀作

夕立の匂ふ満員電車かな 東京 内田 創太
 膝小僧いつもかさぶた麦こがし 神奈川 相良 研二
 幸せの香り仄かに団扇風 千葉 羽矢 真人
 家系図の男女の比率梅を干す 千葉 久野真喜恵
 一枚の布より衣服白牡丹 京都 佐々木志う
 巴里祭やノートルダムに塔は無く 群馬 秋元 さよ
 台風の停電の夜のステークよ 京都 濱田 朋子
 青空のどこからとなく囁れる 兵庫 岸本 悦子
 水鉢を覗けば目高乱れだす 岐阜 藤墳 博明
 遠き日のことあれこれと百日草 長野 瀬端 忠男
 花菖蒲静かに雨の降る日かな 茨城 北浦 敏子
 眩きをマイクが拾ふ曳山祭 和歌山 谷中 明子
 物置のよく片付きて柿若葉 東京 鈴木伊都子
 諸役みな退いて今年の花見かな 山口 村橋 克雄
 打つよりも外に追ひ出す蠅叩 千葉 毘舍利愛子
 送別の宴となりし花見かな 熊本 種元弘一郎
 春雷や焦がれし人を待つ夕べ 東京 佐藤 幸子
 櫛の木の峰走りたる若葉かな 埼玉 松島 孝幸
 病院は時計ゆっくり花曇 東京 原田 幸子
 夜泣きの児くるみて月へドライブす 栃木 深谷 泰子
 ……題詠「野」……

原つばの風の飛びつく夏帽子 富山 小嶋トシコ
 縁先にありし日の母野菊晴 千葉 浜野 稲穂
 朝空に唸る野性の草刈機 東京 島村 實
 野の上は青一色の春の空 東京 榎戸 源茂
 野阜へ光を集む春の風 東京 関 雅己

◆佳作◆

掲載は氏名五十音順です。

家居の身朝日浴びよと夏の来て	四十物敦子	皇后のドレス鶯色風薫る	市川 紀子	この先の五年を思ふ更衣	榎本 節子
にこやかに仰ぎ見るなり吹流し	青木 延子	黄昏の旅の天竺牡丹かな	井出久美子	みちのくのきれいな空気星涼し	遠藤 克子
雪女姉は爆弾低気圧	赤繁 忠弘	桜咲く秩父の水は冷たくて	伊藤 妙	華やぎは水にもありて花見船	大石 坦
明け暮れや風の寄り添ふ余り苗	芥川 卓	花鋏手にしたものの鉄線花	伊藤 忠男	星砂を蹠に踏みて夏惜しむ	大川 千草
「母子ともに元氣」とメール春の宵	阿久津利江	むさしはら散歩は月と連れ立って	伊藤 津良	夕刊の詰碁並べる端居かな	大塩 春治
葉桜やひとりを生くる滑り台	安海 好晴	茶摘唄歌ひし頃をなつかしみ	井上 敏子	鶴引きて残りし池の真っ平ら	大西 昭子
振袖の孫の遺影やさくら餅	安積 邦夫	夕月にこぼれて白き桐の花	井上 宣孝	箱釣の金魚は淡き影落し	大西まりゑ
雨の日は雨に爆発して四葩	あまの樹懶	新弟子のざんばら髪の行く茅の輪	井上 宣孝	五分粥の一口旨し薄暑かな	大貫 和夫
又一人同期の去れり花見頃	荒井 古鷹	免許証返して悩む半夏雨	井上 正敏	鱗粉のこぼれて蝶の最後かな	大山みすず
在りませば百と五本のカーネーション	荒川 清司	目を閉じるほどに目映き夏来る	今井 理務	一片の落花に土の新たなる	岡田 邦男
麦秋は家族の帰ってゆくとこ	荒木 洋子	春北斗杓立てて汲む津波浜	今田 克	活花の水吸う速さ麦の秋	岡野 弘子
跨線橋に打ち付ける雨太宰の忌	荒田 栄子	にほひ立つ田畑の湿り春の土	入澤 愜子	母の日や話せばなみだ出てしまふ	岡部けい子
春風に祝儀袋を燃やしけり	有田 耕三	ペランダで蒲団が伸びる五月晴れ	岩城 正英	牡丹の大きかりける金の蕊	小川美津子
厨辺に独りの咳をこぼすかな	飯野 定子	風青く村は平に梨の花	岩溪 しげ	仔犬嗅ぐ上がりたてなる春の雨	奥村 芳弘
新緑をドーナツの輪つかよりのぞく	伊神 舞子	流れゆく雲の白さよ冬木立	上ノ山陽子	雑煮膳侘しき朝や不帰の妻	尾関 金義
すこやかは無上の誇り風薫る	池谷 硬司	初蝶を牧にちりばめ牛の声	宇賀 英二	脂肪へらす食事うんぬ目借時	小野 慶子
賜りし日和飽くなき梨授粉	池之上輝夫	古稀祝う万年筆や晶子の忌	牛久保悦子	父母の残せし重み籐寝椅子	小野 麻利
鯛のやつて来さうな怒濤かな	石川 明	雑草の花一面に世界あり	薄上 則子	うぐいすの声あでやかに飭する	小野美和子
喫茶店のさらさらカレー巴里祭	石川 春兔	海響きイルカくると梅雨明ける	内山えいじ	初夏に晴のち雨の君とをり	柿谷 有史
桐の花夜明けの晩に鳥になる	石橋 政和	湧水に逸る山女や平家村	宇野みさ子	昭和めく商店街や夏きざす	柿沼 洋子
夕暮れや灯に似て夏蜜柑	伊丹 妙子	文字を書くちからおとろえ春の雪	江口八重子	夕暮れや吹雪きてこそその雪柳	片上 強

百六歳母に春風神の声	加藤 ヒサ	生垣の木香薔薇は黄の雪崩	小平 貞	新しき夢を仕込みて朝寝かな	篠原 枕流
万緑や哀しきときも人は笑み	門脇 明子	母の忌や箱根空木の紅濃くて	後藤 房子	君影草一つ覚えのブッセの詩	鳥崎多津恵
川面より低き釣具屋五月晴	金子日出子	母の日や三面鏡はまだ生きる	小橋 辰矢	靴脱ぎて直ぐに自由の素足かな	島村 實
草むしり生命の抵抗感じつつ	金子 佳子	カタカナノ叔父ノ遺稿ヤ終戦日	小林 英樹	早搗きの八人揃ふ餅の音	清水 洋
遠足の声の集まるゴリラ前	加納 金子	爪先に失言残る熱帯夜	小松 清	焼き立ての食パンのごと麦の秋	城宝寿美礼
遠足の話の尽きぬ夕餉かな	神根 信	前世さて顔搔くゴリラ夏深し	小屋 幸保	溝浚へ終へて近所に馴染みけり	新保 徳泰
藪先の煙草のほひ夜釣かな	川上 虚承	濃尾平野麦を焦して大落暉	斎藤 惠葉	啓蟄や逆立ち試みる米寿	菅谷 貞夫
新しき神宿しけり樟若葉	川口 茂則	新緑の泡吹くごとき勢かな	斎藤 澄子	白服ふわふわ修学旅行生	迪方 温密
大安の文字にて終はる古暦	川崎 和啓	一人居の卒寿の暮し遠蛙	斎藤千寿子	侑芽ちゃんの伸びし手や足夏近し	鈴木 恵子
夫の声ふりむけばただこぼれ萩	川崎 康子	手をつなぎつり竿持ちちて菜花道	坂本キョカ	川風も山風も来る夏の宿	鈴木 正子
武蔵野の空ひるがへるつばくらめ	河田 公枝	後髪束し今朝の薄暑かな	坂本多賀子	待ち人が来て噴水の高くなり	鈴木 正子
せんせがっこいやになってんえこの花	北村 薫	どの家も橋ある路地や夕つばめ	酒谷 貞子	青嵐湖面つぎつぎ裏返し	鈴木美恵子
藤房のまだ簪がほどの揺れ	衣川 洋子	茅ぶきの掘立小屋の鯉のぼり	崎田 宇城	外野手の捕球つつじを散らしけり	桐乃 すす
初水紙漉くやうに生まれけり	木下 涼薫	亀鳴くや妻の寢息にリズムあり	作山 泰一	立ち漕ぎのふらここ天に飛び出しぬ	鈴木 優子
沼凍る風の形を閉じ込めて	木下 藤香	病窓の朝な夕なの桜かな	笹野 青陽	存分に戦つてゐる木守柿	砂山 恵子
免許証返納帰り初音かな	木下 嶺生	尺蠖や気張るとへばる我に似て	佐藤 無風	催馬楽のはねたる社青葉木菟	角 達朗
名を付けて子には宝の兜虫	楠 暢太	白日傘開く涙を振り切つて	佐藤 和男	春泥を背に跳ね上げて帰るなり	関 忠男
耕せば土の息する妣の畑	久保田嘉博	菖蒲田に立てば絵巻の中かとも	佐藤 志乃	躑躅咲き庭を大きく膨らます	園田 和子
小上がりにも鳩の浮巢に目を凝らし	栗山 純臣	油虫逃したことに眠られず	佐藤ます子	朝霞そのをちかたの富士拝す	高木ヤエ子
帰りにも鳩の浮巢に目を凝らし	黒田 恵子	はや白きセーラー服や夏めける	佐藤 美保	予後の指ゆつくりゆつくり髪洗ふ	高田 睦子
機動車の警音蛙の目借時	光田 愛子	草を引き一人暮しを守りけり	佐藤 征子	千年の道千年の泉かな	高畑 半身
国会中継流れてゐたり春炬燵	合田マサル	朝市の桃太郎とはトマトの名	佐野 延子	林中の定席父の夏帽子	滝浪 武
喧騒を静かに畳む薪能	小暮 肇		澤田 れい	十グラムの新茶の贅を買ひにけり	竹内 恵子

庭下駄になじむ足裏や夏はじめ	竹本 孝	梅雨晴間羅漢の笑みに五円玉	寅屋 照夫	産土神の下は黒潮椎の花	原田 咲子
曾孫に手を引かれ行く敬老日	田生 弘子	合鍵を突き返さるる寒さかな	直井 照男	大夕焼まだ帰り来ぬレース鳩	久田 正己
うぐいすの初音を聞きて床上げる	田代 節子	旅人を駅へ案内深雪晴	長澤 享	ふる里の海に抱かれにゆく水着	毘舍利愛子
生きてるぞ大地の叫び大瀑布	館 健一郎	帰省子やわが家の犬に吠えられて	中島 優子	年寄りに空元気あり踊子草	毘舍利道弘
友釣りの友を頼りの夕餉かな	橘 良樹	呼び水のきしむポンプや蝶の昼	中根 武郎	足に咬みつく武蔵野の霜柱	平川 菊哉
武蔵野の空に鼓動や沙羅の花	田中 隆	春暁の厨に匂ふ合はせ味噌	中根 武郎	車椅子降りて二人の董かな	平島 照雄
玉の汗石工の惚れる石の貌	谷合美代子	まつ先に象を見に行く子供の日	中村 頌子	面売の来て春風に面を吊る	福井 英敏
船べりに舟寄せ来るやマンゴー売り	谷口 畔水	会釈して半身の通る牡丹径	成瀬 貢	初燕一日風の吹き荒れて	福田すみ江
下り来る人躲しつつ花の道	谷中 明子	芝刈の音に目敏き鳥並ぶ	鳴滝 暁	木犀の香りの下で待つと決む	福田ミドリ
夏めくや足裏になじむ青豊	田宮美和子	何時からが余生と聞けば終戦日	西川 草笛	まさなる雨後の山あり啄木忌	藤枝 信雄
つぎつぎと産声あげて名草の芽	田村登代子	難聴の爺にもとどく初音かな	西川 順子	少女らの真白き翼夏来る	藤田美和子
牡丹の闇の重さに散りにけり	塚本 治彦	遠き昔の恋が見ゆるよ雲の峰	西本 文子	寄せ鍋の煮えたぎりても独りきり	藤本ミチエ
遠き日の教へ子ら来る花の里	月岡 和子	清明の光散らばる江戸切子	額田 昌安	微震わが貧乏ゆすり冷奴	藤原 啓司
たんぼぼはたんぼぼ幾ら踏まれても	鶴田ちしほ	大水青はらりと空の剥がれけり	能田 孝昌	逃水に引力かいや斥力か	古瀬まさあき
茶摘み唄過密ダイヤの新幹線	出口 重夫	新緑に輝いてゐる隠れ沼	能田 孝昌	いつせいに芳ばしき香の麦を刈る	古屋 輝
恋といふ事故にも遭はで四温晴	手塚 雅風	ひもじさを掘起こしたるさつま藪	秀遊	終活の回顧となりて明易し	逸見 彬有
早々と春蚕に閨をとられけり	寺畑 好春	草笛や今も昔の通学路	萩原 豊彦	おんぶしてだっこする母花の中	保坂 嘉郷
夏つばめ母校が俳句甲子園	土居 直子	田植済み村が明るくなりけり	橋場 之廣	若竹のごときイレブン初勝利	星野 麻子
青空に真向ふ茅花流しかな	東條 恭子	一同が耳となりけりはたた神	橋本世紀男	来ぬ人の噂ばなしや溝浚	堀 昭治
手折らむとすればあわれや踊り子草	常盤 幸子	湧き水をなめる子鹿の背に点々	長谷部容子	山藤の岩畳へとのびにけり	堀米 澄子
風や陽や脳いきいきとみどりの日	徳田しずよ	農学生鱒池の泥掬ひある	浜田 睦子	生きてゐるこの新緑の元宇宙	前沢 五郎
面会の夫連れて来し春の風	戸田ゆき子	乗込の鮎の一匹醒めてをり	林 勝洋	指の傷舐めつつ蕨探しをり	榎谷 栄子
白靴の一ヶ所汚れ大胆に	外山観佳子	年寄りが子供の日ですけれどもね	原 隆治	野遊びや風もやさしく加はりて	松岡 孝子

花冷や亡骸のまだ温きこと 松田 紀子

筍の香り満ちたる厨かな 丸山 竹野

海市立つ能登半島の潤む日に 丸山 与作

揚げ船の拡がる錆や遠郭公 萬年 和子

万緑に過疎の一村没しけり 三浦 一志

肉厚の薔薇ほつてりと咲きにけり 三重野憲治

欲捨てにけり旅衣花衣 溝渕 淑

別れては出合ふ木道花菖蒲 水上れんげ

青空や水天宮の白日傘 箕輪 京子

参道に研屋来てゐる桜かな 宮内 信子

記念樹を檸檬と決めて苗木市 宮川千賀子

笑つても泣いてもひとり朧月 宮崎 清美

銭湯の煙突古りぬ夏の月 宮澤 和子

草笛を吹いて口説いて共白髪 村上 秀吾

春耕やひだりの肘も老いたるか 持田 敏朗

足裏の砂はさらさら夏きざす 百田登起枝

新緑や校歌に唱ふ城の山 森 孝枝

鞦韆を漕ぐや地球に繋がれて 森 要子

師とデート事前に二つサングラス 立科 良友

万緑の湖ゆく船の操舵室 茂呂 典正

春風に駘蕩として物忘れ 安武 豊

金泥を蒔くも伽羅の春仕度 柳川 惠連

横丁の店のこの席生ビール 山崎史保子

オガタマの甘く匂へる新樹かな 山崎 文恵

死と生と蛍袋の花の中 山下 翠紗

青葉木菟鎮守の闇を深うしぬ 山田 浩子

山滴る一人で歩く九十九折 山中 資治

子ののぞく蛍袋の花のうち 山本多津子

水音に始まる暮し木の芽時 山本 則男

ぬいぐるみどれも笑つて春盛り 行藤 郁代

故郷の遠くなりけり冷索麵 與話 和彦

燦燦とたんぼの淵でトンボ釣り 吉井 功

雨あがるページをめくるやうに夏 吉井美代子

大柄な美女の時代よアマリス 吉海江令子

蕎麦の花賑はつてゐる鬮牛場 吉川美恵子

監視小屋鶴の撒餌を山と積み 吉積 漫步

一幅の達磨に対す夏座敷 米倉 和美

流水の白極めたるオホーツク 米澤かほり

揉むほどに深き香りの新茶かな 米田 陸生

花吹雪女優のやうに歩みゆく 米田 陽子

八重山の島のあけくれ蝶渡る 若林 正人

山の日や初代を偲ぶ登山小屋 若林 正人

田の隅で我も生きると余り苗 和田 郁江

葱坊主畑の主となりけり 渡邊 貞夫

……………題詠「野」……………

ほどほどの雪降り野原喜ばす 四十物敦子

野良着きる父さりげなく更衣 阿部眞佐朗

静かなる野鳥の森や初日影 あまの樹懶

武蔵野の台地のはげは緑帯 新井不二夫

野良着まで浸み入るほどに喜雨の畑 飯笹 光子

武蔵野のみささぎに風夏きざす 石井 俊子

野仏や陽炎の中踊りだす 板坂 歩牛

病窓より視野も遙かに冬山嶺 市場 泰輔

お遍路さん行くと野を指すバスガイド 伊藤 妙

古の袖振る恋やむらさき野 入澤 愜子

湧水のおどる武蔵野蕎麦の花 岩田 勝

武蔵野の空朗々と夏ひばり 梅田ひろし

逍遙や野山に蓬生え揃ひ 榎本 節子

礪波野の空をひろげてチューリップ 大西 昭子

浮かれ人騒ぐ上野の桜闇 岡田 明子

古民家の野面灯ろう土匂ふ 岡野 昇

三郡の境の野原山つつじ 岡部いさむ

春野菜ぎつしり詰めた里便り 小澤さき子

帰省子のまつしぐらなり野の小川 小野トメヨ

春暁や鴉の声の野太くて 加藤 貴子

武蔵野や生きて九十新樹晴れ 加藤 孝士

花野花野腕が翼になつてゐた 川崎真樹子

ケチャップの味で食べさす夏野菜	菊池 洋勝	野良鍛冶の轡のおらぶ冷し瓜	角 達朗	友逝くや反魂草の野に出でよ	三浦 美苗
野へ放つ模型飛行機風薫る	木嶋 純子	あちこちで風読む勢子や野焼晴	竹下 和宏	美ヶ原 <small>うつくし</small> の夏野や牛の塩くれ場	水澤 眞澄
わが眉を風の掃きゆく春野かな	木原 登	野ねずみの穴念入りに畦を塗る	田村 陽子	裾野から始まる富士の五月かな	三玉 一郎
夏ひばり駅を孤島に野風濃し	蔵 堯子	武蔵野や象のはな子と桜桃忌	東條 恭子	木下闇から躍り出て野外劇	水上れんげ
蟻が出て野原もやけに暑さ増す	倉持 正紀	春愁や身を投げ捨てて野にありぬ	中川 計介	野藤咲く常磐道を故郷へ	宮城 理香
野晒しの自転車そのままに晩夏	黒木 淳子	体じゅう夢中春野に分け入って	中村 愛	幼子の両手に追われ野に遊ぶ	宮坂美恵子
あざみ野と言ふ町の初夏姪夫婦	黒柳 諒子	空高き野鳥の群れに目を見張り	那須 伸子	雨あがり夏野の風は洗ひたて	宮澤 和子
古る家の雨戸を叩く野分かな	栗原 和子	野遊びの立看板の迂回地図	西川 明美	野火止の流れに消ゆるえこの花	武藤 三山
風薫る君を見ている外野席	小橋 辰矢	野の道のしめりがちな草紅葉	西久保キノ	水温む汀の野外観察会	村橋 克雄
夜長の灯囲みて遠野物語	木幡 嘉子	枯野から大きな鳥の翔ちにけり	能田 孝昌	野良仕事一服雉の恋を見て	百瀬 信之
春が来た広野に雪が残れども	小村 三郎	梅雨明けや蝸 <small>ぶと</small> に蝻 <small>さ</small> さるる野良仕事	馬場 進	野ぶだうの蔓くるくると梅雨に入る	森 祐司
二度三度野山を染むるたびら雪	櫻井 伸良	野苺を摘めば新たな道のあり	羽矢 眞人	草餅のありて厨は野の匂ひ	安井 武
武蔵野の綾子の薔薇を活けにけり	貞住 昌彦	野の川は大き目印つばめ来る	平井 萌梨	晩酌に野趣の天婦羅春隣	山田 収一
一枚を脱いであたたか野も山も	佐藤 孝志	獣毛の乾くぬた場や野蒜摘む	福井 英敏	新品の忘れ日傘や野点あと	山原いっこう
つつじ野や女二人の猿回し	佐藤 敏文	たんぼぼに洋の東西なき野かな	福士 謙二	春の野に転 <small>まろ</small> べば我も万葉人	山脇香代子
大夏野牛久大仏聳え立つ	佐野 延子	野も山も青葉若葉の改元日	藤村 義治	草笛も聞こえる野外授業かな	吉川美恵子
野っ原に弁当あげ春惜しむ	篠原 枕流	星原へ行く道しるべ桐の花	船津 信子	昇平の野火をひもとく梅雨の宿	若林 正人
武蔵野の冬の櫂となりにけり	志村 美好	野あそびの莫産をざらざら引き <small>き</small> ずって	古川 照子	友来たり旬の酒菜の野蒜掘る	若林 正人
はじめての寝返り夏野匂ひけり	白井 正枝	無農薬の野菜噴井に洗ひけり	古屋 輝		
関東平野をバサッと和紙の鯉幟	治郎丸順子	全力で夏野を駆ける絆創膏	星野 麻子		
武蔵野の天地返して茄子の苗	新藤 共子	野遊びのアーミーナイフ草に拭く	細野やすい		
草野球敗者にもある缶ビール	鈴木 武	夕映えが鯛色に染む熊野灘	増谷 俊一		
武蔵野の陵拜す五月かな	鈴木 木香	暫くは自由にさせる野焼きの火	丸山 与作		

令和元年度
NHK学園生涯学習フェスティバル
武蔵野市俳句大会
入選作品集

令和元年八月三日発行

編集
発行
NHK学園

〒一八六一八〇〇一
東京都国立市富士見台二丁目三六―二
電話 〇四一五七二二三二五二(代)

印刷
明誠企画株式会社

作品集の作成にあたっては、あきらかな誤字・脱字
以外は、原作のまま掲載いたしました。
誤植など不備な点がございましたらお許しください。
また落丁本はお取り替えいたします。

あなたの学びを 「本」にまとめて みませんか

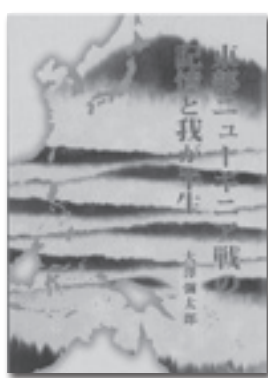
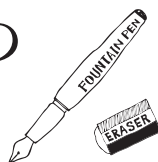
日々の出来事や想いを詠んだ俳句や短歌を

一冊にまとめてみたい。

あなたの人生と大切な作品を

一冊の本にしてみませんか。

NHK学園の 自費出版



学習の成果を1冊に

人生の節目に本を出版される方が増えています。自分のための1冊、家族に贈る1冊。お手元の学習リポートがそのまま原稿になります。

NHK学園の講師がサポート

各分野の講師があなたの本作りをサポートいたします。添削はもちろん、構成やレイアウトもお任せください。跋文も書き添えます。

ご相談・お見積もりは随時

思い立ったら是非一度ご相談ください。学園宛に原稿をご送付いただければ無料でお見積もりもいたします。

合同作品集

全国の仲間とともに一冊の本を仕上げる楽しさが味わえる合同作品集。合同歌集「さくら」、合同句集「くにたち」、川柳合同句集「ふじみ」、「昭和・平成の時代を生きて」など特定のテーマに沿って文章を綴る企画作品集。

俳句、短歌、自分史、エッセイ、アート、絵手紙、書道、写真など、学習の成果を自費出版される方を全面的にバックアップいたします。

2019 出版個別相談会(参加費無料・予約制)

開催日	開催地	会場
2019年2/15(金)	姫路	ホテル姫路プラザ
3/15(金)	名古屋	キャッスルプラザ
4/5(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
4/19(金)	水戸	水戸三の丸ホテル
5/23(木)	高松	高松シティホテル
5/24(金)	高知	高知サンライズホテル
6/20(木)	福岡・天神	アークロイヤルホテル福岡天神
6/21(金)	宮崎	エアラインホテル
7/26(金)	新潟	アートホテル新潟駅前

開催日	開催地	会場
8/22(木)	福島市	ホテル福島グリーンパレス
8/23(金)	青森	ホテルJALシティ青森
9/13(金)	東京・市ヶ谷	アルカディア市ヶ谷
9/27(金)	甲府	ホテルクラウンヒルズ甲府
10/25(金)	金沢	ホテル金沢
11/14(木)	京都	メルパルク京都
11/15(金)	和歌山	シティイン和歌山
12/13(金)	小田原	小田原お堀端コンベンションホール

※相談会にご参加できない方で、原稿をお持ちの方は別途ご連絡ください。場合によっては直接お伺いします。

下記の時間枠を設定、先着順ですでお早めにご予約ください。

①10:30～11:30 ②11:30～12:30 ③13:30～14:30 ④14:30～15:30

- 予約制ですので、ご希望の開催地・時間枠をご連絡ください。
- 会場にご来場できない方、遠方にお住まいの方は、お電話やお手紙にて承ります。
- NHK学園本校(東京・国立市)では個別相談を随時行っております。事前にご予約ください。

原稿は揃っていないなくても大丈夫! まずはご相談ください。出版アドバイザーがていねいにご説明します。

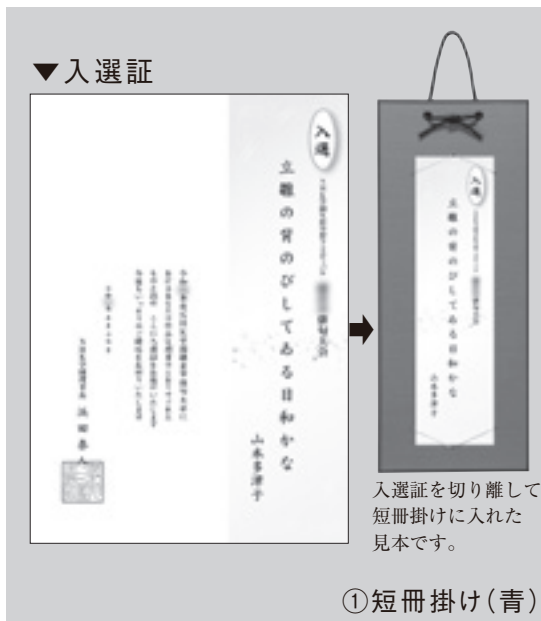
お問合せ NHK学園 自費出版係 ☎042-572-3151(代) FAX 042-572-0061

NHK学園 武蔵野市俳句大会 入選証他専用額・トロフィーのご案内

「武蔵野市俳句大会」ご入選おめでとうございます。ご入選の記念にいかがでしょうか。

《入選証》 1通 1,800 円

- * A4判（297×80 ミリ）でお届けします。
- * 切り離して短冊にすることが出来ます。
- * おおむね1か月でお届けします。



《専用額》

- ①短冊掛け（青）
材質は和紙、壁掛け用です。
1枚 1,700 円（税・送料込）
- ②額（クラシックゴールド）
上品なデザインで卓上・壁掛け両用です。
1枚 2,700 円（税・送料込）



《トロフィー》

- 作品をトロフィーにお彫りいたします。
1つ 14,000 円（税・送料込）
- * 専用申込書をお送りください。郵便局からの払込票をお届けします。
ご入金確認後からお作り始めます。お届けまでに1か月ほどかかります。

キリト

令和元年度 NHK学園 武蔵野市俳句大会 トロフィー専用申込書

ご住所 〒 -

お名前 _____ 電話番号 _____

掲載P	選者名	賞名	作品（全文を記入してください）	数	金額

お申し込み方法 ①または②をお選び下さい。

①普通為替または定額小為替の場合

下の申込書に必要な事項を記入し、為替（郵便局で購入）を同封して、封書でお申し込みください。

※為替には、何も書かないで下さい。

②郵便振替の場合（払込取扱票そのものが申込書になります）

郵便局で取り扱っている払込取扱票の通信欄に（1）大会名、（2）作品の掲載ページと作品全文、（3）枚数、（4）選者名（希望の方のみ）、（5）賞名、また短冊掛け・専用額を希望の場合には（6）商品名、（7）数量を必ず明記してください。金額欄に合計金額を明記して、下記の口座へお振り込みください。

入選証および専用額トロフィーの
申込先・連絡先
〒186-8001（住所記入不要）

NHK学園教材サービス
武蔵野市俳句大会入選証係
TEL 042-572-3151（代）

← 切り取って
封書のあて名に
してください

<郵便振替の専用口座>

口座記号番号											
0	0	1	9	0	7	5	6	3	6	0	8
加入者名	NHK学園教材サービス										

- ※ いったんお申し込みいただいた後のご返金はいたしかねますので、ご了承ください。
- ※ 過去の地方大会の入選証については、平成11年度以降のものに限ります。
- ※ 郵便振替の場合、下の申込書及び振替払込受領証のご郵送は必要ありません。
- ※ 申込書にはお名前、ご住所、電話番号をお忘れのないようお願いします。

キ リ ト リ

為替専用 令和元年度 NHK学園武蔵野市俳句大会 **入選証および専用額申込書**

名前	フリガナ	受講者番号									
住所	〒										
電話番号	-	-									

○入選証

掲載誌ページ	選者名 (希望の方のみ)	賞名	作品（全文を記入してください）	単価（1枚）	枚数	金額
				1,800円		
				1,800円		
				1,800円		

- ◆特選・秀作・佳作の作品には希望される方のみ、選者名が印字されます。
- ◆同じ句を複数の選者から選ばれた場合は、選者別の発行（1選者1枚）になります。ご希望の選者名を明記してください。
4枚以上希望される場合にはお手数ですがコピーをしてご記入ください。

○専用額 ※ 専用額には入選証は含まれません。

短冊掛け（青）	数量	1,700円×	枚	金額	
額・クラシックゴールド	数量	2,700円×	枚	金額	

合計金額 _____ 円 を為替で同封します。

※ 振り込みの場合は、この用紙のご郵送は必要ありません。

実作力アップコース

名句で学ぶ！

表現の幅を広げたい方に

俳句 表現のコツ

- リフレイン、押韻、オノマトペ、一物仕立など、俳句の表現テクニックや効果を学びます。今まで知らずに使っていた表現方法やより効果的な使い方を再確認することで、表現の幅はぐんと広がります。
- レポート課題は3回。各レポートには作句課題がありますので、テキストで学んだ知識が実作で使えているか確認できます。

上級者のためのコース

俳句倶楽部

- 俳壇の第一線で活躍中の講師によるワンポイント・アドバイスと、会員同士の誌上句会を楽しむ、俳句上級者のためのコースです。大会や雑誌の投句で、より上位の賞を目指す方におすすめです。

ワンポイント・
アドバイスが
受けられます

ワンポイントアドバイス講師
(2019年5月)



井上康明
「郭公」



岩岡中正
「阿蘇」



片山由美子
「香雨」



小浜杜子男



高野ムツオ
「小熊座」



寺井谷子
「自鳴鐘」



西村和子
「知音」



三村純也
「山茶花」

- 受講期間1年（自動継続）
- レポート提出9回（ワンポイント・アドバイス投句5句×4回、誌上句会 投句2回、互選2回、コンクール1回）

教材

レポートセット

〈別送〉機関誌（4冊）

「誌上句会 投句集」・「誌上句会 作品集」（各2冊）

◆「俳句倶楽部」の特徴

レポート

- ・ワンポイント・アドバイスは全4回（1回につき、自由題5句提出）
 - ・あなたの提出作品に、俳壇で活躍中の著名な実力派俳人が一言アドバイス。
 - ・希望の講師を選べます。
- ※各講師には定員があります。一定数を越えた場合、ご希望の講師のアドバイスを受けられないことがあります。

誌上句会

- ・誌上で「句会」を楽しみます。
- ・会員の自選作品を掲載した作品一覧から2句選び（互選）、高得点の作品を作品集で発表します。

コンクール

- ・年1回のコンクールは「俳句倶楽部」会員同士で腕を競います。全投句作品が作品集に掲載されます。

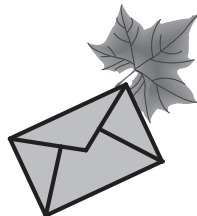
有馬朗人、宇多喜代子、大串 章、
コンクール選者 黒田杏子、鷹羽狩行、深見けん二、
星野 椿、宮坂静生

講座の詳しい案内パンフレットを無料でお送りします。



0120-06-8881 FAX042-574-1006

〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園 6B05 係
ホームページ <https://www.n-gaku.jp/life>



参加者募集中! NHK学園 学習の旅

大人の東京俳句散歩 ～秋の季語「相撲」を詠む～

令和元年9月17日(火)～18日(水) (1泊2日)

訪問先 東京都墨田区(両国国技館ほか)

同行講師 宇多喜代子



「東京の四季を楽しむ」がテーマの俳句の旅です。宇多喜代子先生とともに、両国国技館で行われる大相撲9月場所を観戦し、秋の季語「相撲」を詠みます。力士同士がぶつかり合う迫力のひとときを楽しみ、俳句に詠みましょう。



同行講師
宇多喜代子

「草樹」会員代表 NHK学園俳句講座アドバイザー
昭和十年山口県生れ。「獅林」を経て「草苑」(桂信子主宰) 創刊とともに入会。桂信子没後に創刊した「草樹」の会員としてその精神を継承。第三十五回蛇笏賞、第二十七回詩歌文学館賞、第十四回現代俳句大賞受賞。読売新聞俳壇選者。「NHK俳句」選者。句集『夏月集』『象』『記憶』『宇多喜代子俳句集成』『森へ』など。

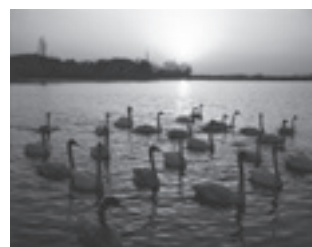
冬の陸奥に高野ムツオの故郷を訪ねて

令和元年12月9日(月)～11日(水) (2泊3日)

訪問先 宮城県栗原市(伊豆沼ほか)

現地講師 高野ムツオ

(「小熊座」主宰、NHK学園「俳句倶楽部」講師)



俳壇で活躍中の高野ムツオ先生の生まれ育った宮城県を訪れます。

宮城県北部にしか飛来しない貴重な渡り鳥マガンをはじめとした多種多様な生物の観察や、伝統芸能「栗原神楽」をこの旅限定で披露いただきます。



現地講師
高野ムツオ

「小熊座」主宰
昭和二十二年宮城県生れ。阿部みどり女、金子兜太、佐藤鬼房に師事。現代俳句協会副会長。NHK学園俳句倶楽部講師。第四十四回現代俳句協会賞、第六十五回読売文学賞、第六回小野市詩歌文学賞、第四十八回蛇笏賞受賞。句集『陽炎の家』『萬の翅』『片翅』、著書『時代を生きた名句』など。

各スクーリングの案内書は

「NHK学園スクーリング事務局」までお電話ください。
受付時間/月～金曜日(祝日除く)の9:30～17:30

TEL 042-572-3151(代表)

FAX 042-573-6090

第二十一回

NHK全国俳句大会

NHKとNHK学園が主催する俳句大会です。おかげさまで、今回で二十回目を迎えることになりました。前回は国内外から自由題、題詠をあわせて、四四、〇〇を超える作品が寄せられました。今回の題詠は「大」です。俳壇を代表する俳人が選にあたり、大会当日はNHKホールに集います。みなさまからのご投句と会場へのご参加を心からお待ちしております。

題詠「大」

投句締切

令和元年9月30日(月)

開催日時

令和2年1月26日(日)

午後1時～午後4時

会場

NHKホール(東京・渋谷)

主催 NHK・NHK学園

後援 文化庁・東京都・公益社団法人俳人協会・

現代俳句協会・公益社団法人日本伝統俳句

協会・国際俳句交流協会

協力 NHKエデュケーショナル・NHK出版

協賛 伊藤園

※大会当日の様子は収録し、編集の上その一部を後日放送する予定です。

選者(五十音順)

自由題・題詠

井上 弘美	坊城 俊樹
宇多喜代子	正木ゆう子
片山由美子	三村 純也
神野 紗希	宮坂 静生
小島 健	龍太賞
高野ムツオ	稲畑 汀子
高柳 克弘	宇多喜代子
夏井いつき	大串 章
西村 和子	鷹羽 狩行

第二十一回 NHK全国俳句大会

新作十五句募集(テーマ自由)

龍太賞

俳人飯田龍太は、俳壇史上でもまれに見る高い文業と清冽な句柄で日本人の心を魅了してきました。

また、「俳句は普段着の文芸、庶民の文芸である」として、その普及と指導にあたり、俳句の裾野を広げるべく、尽力しました。

龍太の功績を称え、より多くの方に俳句に親しんでいただくため、平成二十六年度より「飯田龍太賞」の募集を開始いたしました。

六回目となる今回より賞名を「龍太賞」と改め、年齢、性別、句歴を問わず、幅広く優れた作品を顕彰します。

みなさまのご応募を心よりお待ちしております。

投句用紙は、NHK全国俳句大会事務局までご請求ください。なお、NHK学園ホームページからもプリントアウトできます。

お問い合わせ先・投句用紙請求先

NHK全国俳句大会事務局 〒一八六一八〇〇一

東京都国立市富士見台二一三三六二一

代表電話 〇四二一五七二一三二五二一

(平日9時30分～12時・13時～17時30分)

NHK学園ホームページ

募集要項はこちらから



第21回 NHK 全国俳句大会選者

一句とともにご紹介いたします。(敬称略・五十音順)

自由題・題詠の部



井上 弘美 (いのうえ ひろみ)
昭和二十八年京都府生れ
「汀」主宰、「泉」同人

母の死のとのつてゆく夜の雪



宇多 喜代子 (うだ きよこ)
昭和十年山口県生れ
「草樹」会員代表

種を蒔く土に芽の出るこの世かな



片山 由美子 (かたやま ゆみこ)
昭和二十七年千葉県生れ
「香雨」主宰

開かるること待つ扉大旦



神野 紗希 (かみの さき)
昭和五十八年愛媛県生れ
現代俳句協会青年部長

水脈も葉脈も春てのひらも



小島 健 (こじま けん)
昭和二十一年新潟県生れ
「河」同人

妻に聞く娘のはなし吊忍



高野 ムツオ (たかの むつお)
昭和二十二年宮城県生れ
「小熊座」主宰

あれは稲の匂いだったか母の胸



高柳 克弘 (たかやなぎ かつひろ)
昭和五十五年静岡県生れ
「鷹」編集長

子にほほゑむ母にすべては涼しき無



夏井 いつき (なつい いつき)
昭和三十三年愛媛県生れ
「いつき組」組長、「藍生」会員

水は球体そらも球体春もまた



西村 和子 (にしむら かずこ)
昭和二十三年神奈川県生れ
「知音」代表

堂々の名乗りを待たむ初句会



坊城 俊樹 (はなしろ としゆ)
昭和三十二年東京都生れ
「花鳥」主宰

狼の夢の中にも星溢れ

龍太賞の部



正木 ゆづ子 (ただき ゆづこ)
昭和二十七年熊本県生れ
「紫微」同人

ほつれとも網ともからすうりの花



三村 純也 (みむら じゆんや)
昭和二十八年大阪府生れ
「山茶花」主宰

大仏に見降ろされる淑気かな



宮坂 静生 (みやさか しずお)
昭和十二年長野県生れ
「岳」主宰

はつはるや土偶に熱き噴火口



稲畑 汀子 (いなはた ていこ)
昭和六年神奈川県生れ
「ホトトギス」名誉主宰

母の日の母を忘れて土佐の旅



宇多 喜代子 (うだ きよこ)
昭和十年山口県生れ
「草樹」会員代表

種を蒔く土に芽の出るこの世かな

ジュニアの部



阪西 敦子 (さかにし あつこ)
昭和五十二年神奈川県生れ
「ホトトギス」同人

焼猪の大きな皮をはつしけり



堀本 裕樹 (ほりもと ゆうき)
昭和四十九年和歌山県生れ
「蒼海」主宰

夏蝶の口くくくくと蜜に震ふ



大串 章 (おおくし あきら)
昭和十二年佐賀県生れ
「百鳥」主宰

野遊びの終り太平洋に出づ



鷹羽 狩行 (たかは しゆきやう)
昭和五年山形県生れ
「香雨」名誉主宰

初旅やぐんぐんと山ぐんと海

投句要領 — 自由題・題詠の部 —

◆左頁の所定の用紙(コピー可)を使用してください。
投句用紙はNHK学園のホームページからもプリントアウトできます。
ひとり何組でも、どなたでも応募できます。

- 投句作品は、未発表・自作で、作者本人からの投句に限ります。
- 二重投句(同一作品及び酷似作品を新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、インターネット、インターネット、結社誌、同人誌等へ投句)は固くお断りします。
- 同一作品、酷似作品が先行して発表されていた場合、入選・入賞を辞退させていただきます。

題詠「大」

必ず「大」の漢字を入れてください。作品の季節は問いません。題詠のみの応募はできません。

投句料

①あるいは②の形式をお選びください。何組でも応募できます。

- ① 自由題二句 — 二句一組 二、二〇〇円
- ② 自由題二句と題詠「大」二句 — 三句一組 三、二〇〇円

*題詠のみの応募はできません。

送金方法

◆郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください(切手の代用は不可)。

郵便払込をご利用の場合 ※払込手数料は、ご本人様負担となります。
郵便払込取扱票の通信欄に組数と投句料をご記入の上、払込みください。
振替払込受付証明書を投句用紙の「のりしろ」欄に貼り付けて、ご応募ください。

口座番号：00190151336869
加入者名：NHK学園 俳句大会事務局

海外在住者の応募について

海外在住者の投句締切は9月30日(月)必着

- ◆海外在住の方の応募は一人一組までとし、自由題・題詠の部の投句料は無料。
- ◆メールアドレスまたはFAX番号を明記してください。
- ◆海外投句作品の入選結果は、NHK学園のホームページに掲載します。
- ◆作品集は別途お申し込みください(一部一、五〇〇円)。

ジュニアの部

ジュニアの部の投句締切は9月13日(金)消印有効

- ◆対象は幼児、小・中学生です。
- ◆専用の投句用紙は、NHK学園のホームページからプリントアウトしてください。

投句締切

令和元年9月30日(月) 消印有効

◆投句後の作品の訂正や返却はできません。投句作品の控えをお手元に残してください。

選考

選考結果に関する電話等でのお問い合わせは、ご遠慮ください。

◆予選選者による全作品の選考会を行い、これに通過した入選作品から選者が特選、秀作、佳作を選びます。

◆特選に選ばれた作品の中から、選考結果を考慮し、事務局で大会大賞を決定します。

◆入選・入賞作品はNHK、NHK学園、NHK出版で使用させていただくことがあります。
◆入選以上が内定した作品のみ、作者に12月上旬に文書でお知らせします。

入選作品集

- ◆全投句者に、投句の組数に応じてお渡しいたします(投句一組につき、一部)。
- ◆投句者で会場参加される方 ↓ 入場券と引きかえに、当日会場でお渡しします。
- ◆投句者で会場参加されない方 ↓ 大会終了後に郵送します。
- ◆ご希望の方には、一部一、五〇〇円で頒布いたします。

(書店での取扱いはありませんので、事務局へお申込みください)

発表

◆入選・佳作・秀作・特選の全入選作品は、大会当日(令和2年1月26日)発行の「NHK全国俳句大会入選作品集」で発表します。

賞

◆選者特選・秀作・佳作

全選者が自由題特選2句、題詠1句、秀作、佳作を選びます。

◆選者特選1席に選ばれた作品(自由題・題詠各1句)は、NHKホールのステージで発表します(特選と秀作の方には賞状をお贈りします)。

◆大会大賞

大会大賞作品は、令和元年度文部科学大臣賞の候補作品となります。

※大会大賞には賞状とトロフィーをお贈りします。

大会入場申込方法

申込は、12月13日(金)必着。入場券は、1月上旬にお送りします。

◆入場は無料。どなたでも参加できますが、入場券が必要です。入場券一枚につき、二名様までご参加いただけます。ご希望の方は次の方法でお申し込みください。

●投句する方

投句用紙の「参加する」欄を必ず○印で囲んでください。

作品集引換を兼ねた入場券(八ガキ)を郵送します。投句組数にかかわらず、入場券はお一人につき一枚の発行となります。

※○印がついていない場合は、「参加しない」とさせていただきます。

●投句しない方

往復八ガキに、「俳句大会の観覧希望」と明記し、返信宛名欄に郵便番号・住所・名前をご記入の上、左記の「NHK全国俳句大会事務局」宛にお申し込みください。



前回の入選作品集

お問い合わせ先・投句先

〒186-8001 東京都国立市富士見台2-36-2

NHK学園

「NHK全国俳句大会」事務局

☎042-572-3151 (代)

(平日9時30分～12時・13時～17時30分)

〒186-8001

東京都国立市富士見台 2-36-2

NHK学園

NHK全国俳句大会事務局 御中

投句中

ご投句には、
左の点線を
切り、宛先
として貼る
と便利です。

ここから切り離し郵送

第21回

自由題・題詠の部
NHK全国俳句大会投句用紙

★投句締切 令和元年9月30日(月) 消印有効

※印欄は任意でご記入ください。

名前	フリガナ _____	(男・女) 歳
作品集に掲載するお名前	(フリガナ) 〒 _____	※番号を使うなど本名と違う場合のみご記入ください
住所	_____	
電話番号	_____	
生年月日	明治・大正 昭和・平成	年 月 日

受付番号(NHK学園記入)

大会当日
会場に

どちらかを○で必ず囲んでください。
参加する 参加しない

受付番号(NHK学園記入)

府都道

作品集に掲載する
お名前

(フリガナ)

自由題1

自由題2

題「大」

(希望者のみ)

「大」の漢字を
必ず入れてください。

※題詠のみの投句はできません。

のりしろ

投句料を郵便払込された方は
振替払込受付証明書(お客さま用)
を貼ってください。

お手元がない場合は下記へ払込日をご記入ください。

- 投句料
- 自由題1句の場合 11,100円
- 自由題2句の場合 11,100円
- 自由題1句と題詠1句の場合 11,100円
- 投句料のお支払い方法
- 印をつけてください。
- 現金書留
- 定額小為替 ・ 普通為替
- 郵便払込 (月 日 に払込)

※入場券は、投句組数にかかわらず、投句者1名につき
一枚(2名様入場可)の発行となります。
※印がついていない場合は「参加しない」とさせていただきます。

2句 2,200円

3句 3,200円

龍太賞

新作十五句募集(テーマ自由)

俳人飯田龍太は、俳壇史上でもまれに見る高い文業と清冽な句柄で日本人の心を魅了してきました。

また、「俳句は普段着の文芸、庶民の文芸である」として、その普及と指導にあたり、俳句の裾野を広げるべく、尽力しました。

龍太の功績を称え、より多くの方に俳句に親しんでいただくため、平成二十六年より「飯田龍太賞」の募集を開始いたしました。

六回目となる今回より賞名を「龍太賞」と改め、年齢、性別、句歴を問わず、幅広く優れた作品を顕彰します。

みなさまのご応募を心よりお待ちしております。



プロフィール

飯田龍太 (いひだりゅうた)

大正9年、山梨県東八代郡境川村(現笛吹市境川町)に生まれる。昭和37年、父飯田蛇笏の死去により、「雲母」主宰。清新な詩情と気品ある声調で自然や人間を詠いあげた作品を多く発表する一方、郷土山梨での文芸活動に携わり、山梨県立文学館の創設、山梨日日新聞の文芸欄の選者などを務め、俳句の普及に貢献した。昭和56年、NHK学園俳句講座を創設。講座監修者として多くの俳句愛好家の指導にあたり、俳句の裾野を広げることに尽力した。同年、日本藝術院賞恩賜賞受賞。平成4年、「雲母」900号をもって終刊。平成19年、逝去。享年86歳。(写真提供:飯田秀賢)

【投句用紙】

投句用紙は、NHK全国俳句大会事務局までご請求ください。なお、NHK学園のホームページからもプリントアウトできます。応募は1人1組に限ります。どなたでも応募できます。

- 投句作品は、15句とも自作で未発表作品に限ります。
- 既発表作品・二重投句(同一作品及び酷似作品を新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・コンクール・インターネット・結社誌・同人誌等へ投句や、ホームページ・ブログ等に掲載)は、固くお断りします。
- 15句中に既発表作品、二重投句、酷似作品があれば、無効となります。

【投句作品】

新作15句を1組とし、募集します。テーマは自由です。表題(タイトル)をつけてください。

【投句締切】

令和元年9月30日(月)消印有効

【投句料】

1組15句 5,000円(1人1組に限る)

【送金方法】

自由題・題詠の部と同様に、郵便為替(定額小為替、普通為替を郵便局で購入)、現金書留、郵便払込のいずれかをご利用ください(切手の代用は不可)。口座番号:00190-5-336869
加入者名:NHK学園 俳句大会事務局

【選考】

15句を1組として一次選考、最終選考を行い、入選作品および選者賞・龍太賞を決定します。入選が内定した作者および受賞が内定した作者には、12月上旬に文書でお知らせします。

【賞】

- ◆ 龍太賞……………選者の合議による最終選考を経て、1組(15句)を決定。
 - ◆ 選者賞……………各選者1組を決定。
- 龍太賞は、NHK全国俳句大会(NHKホール)ステージで発表します。

【発表】

入選作品と作者名は、大会当日(令和2年1月26日)発行の「NHK全国俳句大会龍太賞入選作品集」で発表します。なお、投句者には作品集を1冊お渡しいたします。龍太賞、選者賞、入選作品をNHK学園ホームページに掲載します。

【投句先】

NHK全国俳句大会事務局
〒186-8001 東京都国立市富士見台 2-36-2 NHK学園内

選者



稲畑 汀子

公益社団法人
日本伝統俳句協会会長
「ホトトギス」名誉主宰



宇多喜代子

現代俳句協会特別顧問
「草樹」会員代表



大串 章

公益社団法人
俳人協会会長
「白鳥」主宰



鷹羽 狩行

公益社団法人
俳人協会名誉会長
「香雨」名誉主宰



前回のステージから



前回の入選作品集